

財団法人 東洋文庫年報

昭和43年度—昭和47年度

財団法人 東洋文庫

財団法人 東洋文庫年報 昭和43年度—昭和47年度

目 次

I 東洋学センターとしての東洋文庫	3
II 図書館事業	7
1. 図書の収集・整理と閲覧	7
2. 複写サービス	8
3. 展示会	8
III 研究事業	9
1. 調査研究	9
i 文部省科学研究費による調査研究	9
ii 一般調査研究	10
iii 特別調査研究	13
2. 学術図書出版	15
3. 講演会	18
4. 研究会	20
5. 研究者養成	21
6. 国内・国外研究者への便宜供与	22
7. 職員の研究業績	23
IV 東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター事業	47
1. 調査研究	47
2. 連絡および情報交換	51
3. 学術図書出版	54

4. 研 究 会	54
5. 語学講習会	55
6. 国 際 交 流	56
V 業 務 報 告	59
1. 庶 務 報 告	59
2. 人 事 報 告	64
3. 会 計 報 告	67
附 役 職 員 名 簿	69

I 東洋学センターとしての東洋文庫

これは、昭和43年度から47年度に至る5年間の財団法人東洋文庫の事業報告である。それまで毎年度出されていた年報が、43年度以後刊行を停止されていたのは、文部省の補助金で刊行されているこの年報に、補助金で行はれている以外の事業の報告が併せ載せられているのは、補助金の正しい遣い方ではないという文部省の注意によるものであった。しかし、この報告にもあるように、東洋文庫からはいくつかの出版物が世に送られているが、文部省の補助金の使い方をこのように限定すると、補助金で行はれたのではない内容の研究を補助金で出版することは出来ないことにもなりかねない。このたび、そうした堅固しい、そして狭い解釈が自然に解消して、年報刊行に対する補助金は、財団法人東洋文庫の事業の全体についての報告の出版に遣われるべきものであるとの理解が復活し、ここに5年間の業績の概況をまとめて報告出来るに至ったことは、誠に喜ばしい。

財団法人東洋文庫は大正13年11月19日に成立した。それは、(1)東洋学の研究に必要な図書を組織的に、そして網羅的に蒐集し、整理して、学者の利用に供する、(2)東洋学の研究業績の中、特にすぐれたものを刊行して、研究の水準を高める、(3)一方、展示会・講演会を通じてそうした専門知識の普及を計る、(4)そのほか東洋学研究の進歩に貢献すると考えられる諸般の事業を行うことを目的として出発したもので、図書部のほかに研究部が併置されて、国内の国立・私立諸大学の教授の中から選ばれた何人かの研究員が専門研究に従うと同時に、日本の東洋学界と東洋文庫との連絡掛として、出版に値する研究の成果の推薦に当たったのである。日本の近代的な東洋学研究が西欧の東洋学研究の刺激によって成立し発達したものであることは、周知知られているが、東洋文庫はそうした日本の東洋学研究の成果の代表的なものを出版する一方、各年度に発表された論文の中から、特に欧米の学者の興味を惹くと考えられるものを選んでこれを欧文に訳し、毎年世界に紹介して来た。そして、その出版物は広く内外の関係学術機関と研究者とに寄贈せられた。

日本には、それまで東洋学関係の図書を所蔵する図書館はあったが、これに研究部が併置されていたものはなく、東洋学関係の学科を設ける大学も次第に増えて来たものの、その設備は必ずしも整備されているとはいえなかった。そうした時代に、このような目的をもって東洋文庫が設立されたことは、正に日本の東洋学界に新しい時代の始ったことを示すものであった。

財団法人東洋文庫は、岩崎久弥氏の寄附によって出来たものである。岩崎氏は、大正6年、G. E. モリソン氏の蒐書を購入し、以来引続きこれに新刊本・新資料を追加して来たが、大正13年、これらの蒐集のすべてに、新しい敷地・建物・設備と運営に必要な基金とを添えて財団法人を設立した。これに伴って、支那を中心とする欧米の書籍の蒐集であったモリソン文庫は、アジア全域に関するヨーロッパ語のみならず、各地域の国語による書籍の蒐集に拡大せられ、新たに研究・出版の2事業が加えられたのである。そして、岩崎氏寄附の基金から生ずる果実はこれらのすべてを賄って余りあるものであった。

不幸にして、第2次大戦に伴う経済界の大変動は、この基金を殆ど無価値にしたが、内外の諸財団・日本政府、東洋文庫維持会に加入している諸会社の援助によって、今日まで、十分とはいえないまでも、当初からの目的にそって、事業が継続されていることは、学界のために慶賀に堪えない。中でも日本政府が戦後いち早く国立国会図書館支部東洋文庫を設置し、そこに始め9人、後に8人の職員を常置して財団法人東洋文庫の図書の整理・閲覧の業務に協力せしめ、文部省を通じての補助金の給附によって図書の購入、研究成果の出版を助け、さらに東洋文庫維持会及び諸財団がこれを補強していることは、特筆しなければならない。

しかし、第2次大戦に伴う変動は、一方において東洋文庫の本来的な使命の遂行に大いに加えるところがあった。それはまず、東洋文庫が国内的な東洋学研究のセンターである性格を一層具体的に示したことである。東洋学連絡委員会が設けられ、全国から15人の委員が参加して東洋文庫の事業について検討協議していることや、同じく全国的規模において委嘱せられ、選択せられた40人を超える専任・兼任の研究員・研究生及び諸大学から派遣せられた流動研究員がそれぞれの研究に従事していることは、これを最もよく示しているであろう。さらに、研究部に諸外国の著名な東洋学者が名誉研究員として加はり、日本学術振興会等の招聘による外国人学者の長期或いは短期の滞在研究が断えず行はれていること、諸外国の研究機関や学者との出版物の交換が戦前に数倍する規模で行われていることなどは、東洋文庫の規圖して来た世界に日本の東洋学を紹介しようとする機能を、一層活潑にすることになった。

この東洋文庫の国際的機能の遂行を劃期的に増大せしめているのは、日本政府とユネスコとの協力によって東洋文庫に附置せられている東アジア文化研究センターである。これは、日本を含む東アジア諸国が協力して、東アジアの文化を欧米人によりよく理解させることを本来の目的として設けられたものである。それは(1)諸種のテーマについての東アジア諸国の学者の共同調査・共同研究、(2)東アジア諸国の文化の理解に役立つ、主として東アジア人による著書・研究の出版、(3)東アジア諸国間の人物交流を主な事業とするものであるが、東アジアの文化を欧米人に理解させる以前に、東アジア人が相互にその文化を理解しあうことが必要であり、さらに東

アジアの文化の正しい理解には、東アジア以外のアジア諸地域の文化の理解がどうしても欠かせないことが痛感せられるので、今や東アジア人の相互理解を事業の柱の一つに加え、さらに活動の範囲を次第に拡大して全アジアに及ぼそうとしている。このセンターの行った調査の報告やそのほかの出版物が、すべて英語で発表される原則になっていることは、その国際的な性格を示しているものである。ユネスコ本部が中心となって企画するアジア文化関係の事業についても、その東アジア関係の研究的な部分はこのセンターの協力によって行はれるのが常である。

財政的に見た東洋文庫の運営は決して楽観を許されない。また、この年報に記録されている5年間の業績も必ずしも満足すべきものではない。しかし、如何なる情况のもとに置かれても、国内的及び国際的な東洋学研究的センターとしての東洋文庫の機能を発展させるように出来るだけ努力したいものである。

さらに一言したいのは、昭和42年度より45年度における書庫及び研究室の増築である。長い間狭隘に悩んで来た東洋文庫の不便がこれによって一挙に解決された。これは日本船舶振興会を始め、諸会社・諸氏の温かい理解と援助との御蔭である。今日これを利用して恩恵に浴している内外の諸氏とともに、その厚意を深謝する。

昭和43年度から47年度に至る5年間には、若干の人事の異動があった。その中で最も大きいのは、昭和26年3月以来、理事長として東洋文庫の成長を温く見守って来られた細川護立氏(1883.10.21—1970.11.18)の逝去である。井上準之助・林 樞助・清水 澄・幣原喜重郎につぐ第五代目の理事長で、19年に亘る在職はそれ以前の理事長の誰よりも長いものであった。

細川護立氏は、最後の熊本藩主細川慶順(後に^{よしくに}詔邦と改む)の弟で家をついだ護久の四男。諸兄の戦死・逝去の後を承けて細川家をついだ。侯爵として貴族院議員に列せられたが、国宝保存会会長・帝室技芸員撰択委員・帝室博物館顧問・美術振興調査会会長等の戦前の役職や日本美術協会顧問・国立博物館顧問・同評議員・文化財保護委員会委員・京都国立博物館館長・国立近代美術館評議員・文化勲章受賞者選考委員・文化功労者選考審査委員・国立西洋美術館評議員等の戦後の肩書が示すように、学問的な教養の高い文化人であり、特に美術の鑑識については専門家を凌ぐ知識と眼光とを具えていた。日本・支那の古美術品や古典籍・書画の蒐集は、夙に細川コレクションとして日本のみならず外国でも名高く、それを見るために細川邸を訪れる欧米の専門家はあとを絶たなかった。これらの蒐集は昭和25年設立された財団法人永青文庫に収蔵されているが、それには25年以後集められたものも加えられている。書の中では白隠・仙厓等の禅僧の筆蹟の大蒐集が、絵画では横山大観・菱田春草等の日本画家や梅原龍三郎・安井曾太郎等の洋画家の作品のコレクションが特によく知られ、支那美術は上は殷代から下は清朝に及んでおり、杉村勇造氏の著「乾隆皇帝」の図版には、それと明記してはいないが、細川氏蒐集のものが多く利用されている。ササン

朝のガラス製品、漢代の泥像等にも秀作が多い。これらの多くは、まだ世人が注意しない時にその価値を認め、他に先んじて集められたもので、氏の眼識の高さをよく物語っている。

古城貞吉・狩野直喜・宇野哲人等、熊本出身の学者は勿論、内藤虎次郎・原田淑人・梅原末治その他の多くの日本の学者及び美術家と交われたほか、セルゲ＝エリセエフ・ポール＝ペリオ・ル＝コック等、欧州の学者との交渉も浅くなかった。大正15年から翌昭和2年にかけて約1ケ年半パリに居を構え、そこを中心に欧州の各地に遊ばれた。その時の生活は、余程愉快であったようで、後年しばしばその思い出を口にせられた。アンリ＝コルディエ（1849—1925）の蔵書を一括購入したり、東京帝国大学の楽浪郡の遺蹟の発掘を援助したりするような形で、学界への寄与も少くなかった。

能その他の貴族的教養を広く身につけられていたのは勿論、書を能くし、漢詩に巧みで、文心雕龍のような難解な漢籍の諸篇を易々として暗誦せられる力量に至っては、人を驚かすに足るものがあつた。一面、スキーを得意とし、特に山を好み、アジア・ヨーロッパの山に関する書籍を博く集めた。欧州では車中から、登ったこともないアルプスの諸峰の名称を——指摘して傍を一驚せしめたという。氏が東京地学協会会長で、英国王立地理学会の終身会員に推薦せられたのは、こうした山についての造詣が高く評価せられていた結果である。しかし、氏について最も敬服させられるのは、その人間としての立派さである。仰げばいよいよ高しという言葉は、正に氏のような人のためにあるのだと嘆ぜさせられたこと、一再でない。ここにそれについて詳述する余白のないのを遺憾とする。こうした人を長期間理事長として戴いた東洋文庫は誠に幸であつたというべきである。

細川護立氏に遅れること約1年、昭和46年11月6日、岩井大慧氏（1891〔1886?〕・10・15—1971・11・6）が逝去せられた。氏は大正8年以來モリソン文庫に関係、昭和14年財団法人東洋文庫主事に就任、23年8月国立国会図書館支部東洋文庫が設立されるとその文庫長に任じ、40年までその発展に尽瘁せられた。氏の活動と研究業績とは「岩井博士古稀記念典籍論集」巻頭の年譜及び著作目録に詳しい。この論集に稿を寄せるものすべて101人。凡そ日本東洋学界の耆宿と新鋭との代表を網羅して余すところないに幾い。以て博士の学界における声望の高さを察すべきであろう。

I 図 書 館 事 業

1. 図書の収集・整理と閲覧

購入・交換・受贈の手段を通して資料の収集につとめ、近代東アジアを中心とするアジア全域の研究資料図書館として、今日の要求に応えうる機能の充実を目標に資料の収集をはかった。一般文献資料の他、中央アジア特別文献の収集にもつとめた。昭和47年度末現在の蔵書数は549,367冊である。

昭和43年度より47年度にかけて購入、交換で受入れた資料の総数は次の通りである。

・ 資 料 購 入

区分 \ 年度	昭43	44	45	区分 \ 年度	昭46	47
単行本	909	511	810	和漢書	314	450
定期刊行物	327	115	99	洋書	94	104
複写資料	11	207	1,756	複写資料	0	0

・ 中央アジア特別文献資料の購入

区分 \ 年度	昭43	44	45	区分 \ 年度	昭46	47
単行本	518	411	214	和漢書	324	52
定期刊行物	44	71	20	洋書	730	671
複写資料	29	0	1,709	複写資料	1,709	0

・ 資 料 交 換

区 分		年 度					
		昭43	44	45	46	47	
受 贈	和漢書	単 行 本	5,640	1,571	3,210	2,256	942
		定期刊行物	1,843	1,567	1,676	1,392	1,420
	洋書	単 行 本	4,800	845	382	455	396
		定期刊行物	1,794	1,669	1,101	1,184	911

寄贈	国内	単行本 定期刊行物	129 772	356 888	598 1,064	163 741	834 1,045
	国外	単行本 定期刊行物	196 1,682	162 939	671 1,206	183 891	583 1,385

昭和43年度より47年度にかけての閲覧室の利用状況は下記の通りであった。

年度	区分	開館日数	閲覧者数	閲覧図書数
昭 43		286	5,905	90,380
44		283	4,042	77,863
45		284	4,192	71,595
46		283	4,877	67,648
47		274	4,418	57,781

2. 複写サービス

昭和43年度より47年度にかけて処理した複写数量は左記のとおりである。

年度	区分 申込件数	撮 コ マ 数	ポジ作成 ・ コマ数	引伸枚数	電子複写 申 込	枚 数
昭43	835	99,582	235,605	79,738	616	17,942
44	753	110,394	186,899	65,943	447	13,123
45	768	91,113	148,019	87,155	594	18,753
46	799	104,648	59,321	108,661	793	23,367
47	833	129,556	111,064	110,410	610	26,444

3. 展 示 会

第54回東洋文庫展示会〔期日〕昭和45年11月7日～8日〔主な展示図書〕モリソン博士とモリソン文庫・文庫所蔵義和団事変関係の図書・資料

第55回東洋文庫展示会〔期日〕昭和46年11月13日～14日〔主な展示図書〕ポルトガルのアジア進出史に関する史料

第56回東洋文庫展示会〔期日〕昭和47年11月11日～12日〔主な展示図書〕広橋本・禰寝文書ほか、近世自筆本・清鈔本・明刊本・モリソンパンフレット等

II 研究事業

1. 調査研究

調査研究は、文部省科学研究費によるものと、文部省民間学術研究機関補助金による一般・特別調査研究とにわかれる。

i 文部省科学研究費による調査研究

一般研究 A

【課題】「唐末以降1940年代にいたる中国の地主制の体系的研究」【期間】昭和43年度～昭和45年度【担当者】青山定雄【協力者】市古宙三、榎一雄、神田信夫、菊池英夫、草野靖、佐伯富、鈴木俊、周藤吉之、田川孝三、田中正俊、鶴見尚弘、中嶋敏、宮坂宏、松村潤、村松祐次、山根幸夫

【課題】「日本を中心とする近代東アジア国際関係の史的研究」【期間】昭和46年度～昭和47年度【担当者】市古宙三【協力者】岩崎富久男、岡田英弘、神田信夫、菊池英夫、田川孝三、田中正俊、鶴見尚弘、坂野正高、宮坂宏、松村潤、村松祐次、森岡康、山根幸夫

特定研究

【課題】「日本の近代化過程に対する国際的評価とその背景」【期間】昭和41年度～昭和44年度【代表者】榎一雄【分担者】有馬成甫、生田滋、市川健二郎、市古宙三、岩生成一、岩崎富久男、神田信夫、北村甫、河野六郎、鈴木俊、田川孝三、田中時彦、田中正俊、島海靖、沼田次郎、坂野正高、前田健次、松村潤、村松祐次、護雅夫、安岡昭男、山根幸夫、山本達郎

総合研究

【課題】「中国周辺諸言語に関する中国資料の調査研究」【期間】昭和44年度～昭和46年度【代表者】辻直四郎【分担者】生田滋、榎一雄、亀井孝、北村甫、河野六郎、後藤明、鈴木真喜男、西義郎、三根谷徹、松村潤、護雅夫、山口瑞鳳、頼惟勤

【課題】「李朝後半期の農村社会文化」 【期間】昭和46年度～昭和47年度 【代表者】田川孝三 【分担者】 大谷森繁、長正統、北村秀人、河野六郎、末松保和、武田幸男、中村完、森岡康

海外学術調査

【調査名】「インド・シッキム・ブータン・ネパールにおけるチベット文献の調査と収集」 【担当者】榎一雄 【協力者】北村甫、兄野寿満子、西義郎、山口瑞鳳 【期間】昭和45年度（実施期間昭和45年9月27日～昭和46年2月11日）

【調査名】「インド・シッキム・ブータン・ネパールにおけるチベット文献の調査と収集」 【担当者】北村甫 【協力者】金子良太、川崎信定、祖南洋、山口瑞鳳 【期間】昭和47年度（実施期間昭和47年10月1日～昭和48年3月16日）。

ii 一般調査研究

東亜考古学研究委員会

【資料の整理・分類】(1) 梅原末治氏寄贈の東亜考古学資料中の日本関係資料の時代別（先土器・縄文・弥生・古墳・歴史時代）分類，それらの諸項目（遺跡・遺物等）ごとの整理，目録作成のためのカード化。(2)第3次分資料（昭和46年10月到着）中の日本関係資料の第2次分資料への繰込み。

古代史研究委員会

【講読・研究】西周金文（西周金文辞大系）の講読，および，経学・言語学・考古学・歴史学からの総合的研究。

唐代史（敦煌文献）研究委員会

【国内・国外に現存する西域出土古文書・古文書の所在調査，マイクロ・フィルムによる収集，収集資料の公開，情報提供】(1)北京図書館所蔵敦煌文献（『敦煌掇瑣録』の麗字31から余字55まで。計7,749点）のマイクロ・フィルム計86リールのうち，当文庫は，すでに北京図書館との図書資料の交換の一つとして33リールを入手していたが，昭和43年度に残りの53リールのコピー・フィルムを，榎一雄氏によってケムブリッジ大学図書館より入手し，その影印本を愛知学院大学，東京大学，霊友会，東北大学などに提供した。(2)パリ国立図書館所蔵ペリオ蒐集敦煌文献のうち，わが国の研究者が個人的な形で注文将来されたもので，当文庫にマイクロ・フィルム，或は焼付写真のかたちで寄贈をうけたものは約715点である。それらには，大藏経未収の仏典関係・禅宗関係文献，道教文献，文学文献，碑文・伝記，書簡，公文書，契約・寺院経済・

社関係等文書が含まれている。個人別にみると、藤枝晃氏174点(写真)、大淵忍爾氏116点(写真)、井ノ口泰淳氏62点(写真)、池田温氏129点(マイクロ)、石塚晴通氏234点(マイクロ)となる。(3)スタイン蒐集敦煌文献のうち、断片(屑)として未整理になっていたものがあるが、そのうち整理済みとなった文献610点のマイクロ・フィルムが大英博物館より寄贈され、その焼付写真を作成した。(4)石塚晴通氏よりレニングラード東洋学研究所所蔵敦煌文献49点の焼付写真の寄贈をうけた。【整理研究】昭和43年度より45年度にかけて、金岡照光氏が中心となりスタイン蒐集敦煌文献及びわが国に個人によって注文将来されたペリオ蒐集敦煌文献のうちから、文学関係文献を抽出し、その整理研究を行った。【出版】上記、整理研究の成果の一部は、金岡照光編『敦煌出土文学文献分類目録附解説—スタイン本・ペリオ本—』(西域出土漢文文献分類目録Ⅳ)として、昭和46年3月に刊行した。

宋代史研究委員会

【索引・文献目録等の作成・出版】(1) 以前から作成中の宋人伝記索引の刊行、宋代史年表南宋篇の完成(近刊予定)。(2)宋会要輯稿食貨の語集索引ならびに事項の要約編成(増補継続中)。(3)宋代史研究文献目録Ⅲおよび宋会要輯稿研究備要の作成(昭和44年度、45年度刊行)。(4)宋代史研究者名簿の作成。【情報活動】宋代研究文献速報(季刊)の発行。

明代史研究委員会

【調査・研究】(1) 昭和43~46年度にわたって、明清社会経済史語彙の釈義・考定の作業をおこなった。(2)昭和47年度から、3カ年の計画にもとづいて、前近代中国社会の契約文書に関する調査・研究に着手した。【講読】(1) 昭和43~44年度にわたって、「大誥三編」「大誥武臣」「教民榜文」「大明令」「大明律」の講読・研究をおこなった。(2) 昭和46年度以降、『綏寇紀略』を主として、明代農民起義に関する文献の講読・研究をおこなっている。【出版】昭和45年度に、山根幸夫編『日本現存明代地方志目録(増補版)』を刊行した。

近代中国研究委員会

【出版】(1)『近代中国研究センター彙報』(No. 11~15) (2)『解放日報』記事目録Ⅲ (3)『東洋文庫別置東アジア関係欧文図書目録』(4)村松祐次『近代江南の租税』(5)『中国関係図書目録(和文1957-1970)』(6)『東洋文庫近代中国研究室中文図書目録Ⅲ』(7)山本澄子『中国キリスト教史研究』【図書収集】中国文3,655点、日本文1,518点、欧文1,570点、マイクロ・フィルム349点。【研究】(1)日本の近代化過程に対する国際的評価とその背景の研究。(2)日本を中心とする近代東アジア国際関係の史的研究。(3)明

治以降の近代中国に関する日本人の視察報告書類の総合的解説。(4)中国共産党資料の書誌学的研究。

近代日本研究委員会

【研究】日本以外のアジア諸国における近代化の過程の検討、および、その成果と、日本の近代化の過程との比較考察。

本委員会は、また、近代日本語の形成に係わる諸要因の究明に主目標を置いて、数年来にわたって次のような活動をしてきた。

【研究】(1)東洋文庫蔵の古写本「史記桃源抄」の研究。(2)東洋文庫蔵の古活字版「中華若木詩抄」の研究。【講読】「キリシタン版ハビアン抄平家物語と百二十句本平家物語」(～71年)、「吉利支丹御対治物語」等(72年)を講読した。【出版】本委員会のメンバーが中心となって、E. サトウの「会話篇」に続いて J. J. ホフマンの「日本語文典」(68年)、および J. C. ヘボンの「和英語林集成〔再版本〕」(69年)を刊行、東洋文庫論叢のうち「天草版金句集の研究(吉田澄夫)」および「玉篇の研究(岡井慎吾)」(共に69年)を複刊、岩崎文庫古板本の中から「好色小柴垣」と「中華若木詩抄」(共に70年)、および「天正十八年本節用集」(71年)を複製出版した。【資料収集】昭和47年度の流動研究員(酒井憲二)の研究テーマに関連した字体関係の図書(「宋元以来俗字譜」等)を若干収納した。

満州・蒙古(清代史)研究委員会

【研究・出版】(1) さきに刊行した『満文老檔 I-VII』(昭和30-38年)の原拠文書集である『旧満洲檔』(台北、民国58年)の研究を行い、昭和44-47年の間に4回、台北の故宮博物院を訪れて、原本と複製本を照合し、『満文老檔』に脱落している記事を含む第9冊の訳注を『旧満洲檔 天聰九年 I』を東洋文庫叢刊第十八として47年3月に刊行した。(2)『鑲紅旗檔』の研究：昭和44年から、東洋文庫所蔵の鑲紅旗満洲都統衙門の檔案(主として満文)の整理に着手し、全2,000余点のうち約半分の同治年間に至る分を完了、そのうち最も年代の早い雍正年間のもの54点を訳文を添えて『鑲紅旗檔 雍正朝』として47年3月に刊行した。この事業には細谷良夫が参加した。【講読・史料収集】清初三朝(太祖、太宗、世祖)の実録の成立史の研究の一部として、『籌遠碩画』、『奏疏稿』(一名『天聰朝臣工奏議』)など漢文史料の輪読を行い、田川孝三、阿南惟敬、田中宏巳がこれに参加した。これと平行して『清太宗実録』諸本の収集を行い、故宮博物院所蔵の順治本1種、および康熙本4種のマイクロ・フィルムを入手した。

朝鮮研究委員会

【資料の調査・収集・整理】(1)東洋文庫機関研究によって収集した内閣文庫・静嘉堂

文庫・宮城県立図書館・西尾文庫・蓬左文庫などの所蔵する朝鮮本マイクロ・フィルムによる目録の作成。(2)法典関係文献の全般的調査、新資料『経国大典註解』の研究、とくに18世紀以降における法制書の収集・整理。(3)18世紀以降の民政関係資料および野談小説類・言語関係資料の収集・整理。【資料講読】『世宗実録』『経国大典』の講読(昭和45・46年度)。【研究】18, 19世紀を中心とする農村地域社会の自治的組織の研究。【索引の作成】(1)『経国大典』の索引カードの作成。(2)漢字によって標記された朝鮮語集索引の作成。

中央アジア・イスラム研究委員会

【資料の収集・整理】(1)イスラム諸国の現地語文献、とくにトルコ共和国の諸図書館所蔵のオスマン・トルコ語のマイクロ・フィルム化と整理。(2)北アジア・中央アジア・イスラム史に関するロシア語文献の購入と整理。(4)ソ連発行のバック・ナンバーのマイクロ・フィルム化と整理。(4)東洋文庫所蔵のアラビア語・トルコ語本、およびイスラム関係図書の分類目録の編集(昭和47年度、48年度に出版予定)。【研究】(1)トルコ民族のイスラム化に関する研究。(2)西アジア史におけるイスラム時代の意義の研究。(3)トルコと日本の「近代化」に関する比較研究。(4)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所における『アルタイ学辞典』の編集への協力(昭和47年度以降)。

南方史研究委員会

【資料の収集】東南アジア・インド関係の資料収集のための調査。【研究】各委員の専門分野の個別研究。【情報交換】他の研究機関・研究者との間の情報交換。

iii 特別調査研究

チベット研究委員会

チベット研究委員会は、昭和36年度にインドからチベット人研究協力者3名を招聘、以来「チベット人との協同によるチベットの言語・歴史・宗教・社会の総合的研究」を実施して来たが、昭和43年度から、その新たな展開を企図し、東洋文庫に対する文部省補助金によるチベット特別調査研究、研究題目：「チベットの歴史と文化の系統」を開始した。同研究は10年計画で、対象とする時代を年度別に下記のように設定。チベットの文化、社会の諸相について、周辺諸地域の文化、社会と比較しつつ、その特質を明らかにしようとするものである。

昭和43～45年度：古代チベット（7世紀以前、7～10世紀）

昭和46・47年度：中世チベット（10～14世紀）

昭和48・49年度：近世チベット（15～17世紀）

昭和50・51年度：近代チベット（18・19世紀）

昭和52年度：現代チベット（20世紀）

昭和43～47年度の主な研究内容，研究担当者は次のようである

I 古代チベット研究（昭和43～45年度）

【歴史班】山口瑞鳳 【言語班】北村甫，西義郎 【チベット人研究協力者】ソナム・ギャツォ bsod nams rgya mtsho，ケツン・サンポ mkhas btsun bzang po
敦煌出土チベット文書（年代記），*lho brag chos' byung*. 「ホタ仏教史」，*bka' thang sde lnga*. 「五部教勅」，13世紀以後成立したチベット歴史書，中国歴史書等を資料として，7世紀吐蕃王朝成立前後における王朝を形成した部族と周辺諸部族との関係，吐蕃王朝の軍制の成立過程と軍制の内容，吐蕃王朝衰亡の過程について研究を進め，敦煌出土チベット文書等の言語学的分析により古代チベット語再構成のための基礎資料を整備した。

II 中世チベット研究（昭和46・47年度）

【歴史班】山口瑞鳳，金子良太 【宗教班】山口瑞鳳，川崎信定，立川武蔵 【言語班】北村甫，星実千代 【チベット人研究協力者】ソナム・ギャツォ，トゥブテンダタク thub bstan zla grags.
sa skya pa'i bka' 'bum. 「サキヤ派全書集成」，土観：*thub mtha'*. 「一切宗義」，*rgya bod yig tshang*. 「中国・チベット史料集」，*deb dmar gsar ma*. 「新赤冊」等を資料として，10～12世紀における寺院都市国家とチベット仏教諸宗派の成立過程，13～14世紀における元朝のチベットにおける支配権確立の過程，元朝の衰退に伴うチベット国内情勢の変動，14世紀後半に興隆したチベット仏教黄帽派と旧派との関係等を明らかにし，ミラレパ *mi la ras pa* の *mgur 'bum* 「十万歌」を資料として中世チベット語の特質を考察した。

III チベット文献の収集と整理

以上の諸研究および昭和48年以降に予定される研究に必要なチベット文献の収集と整理を進めて来たが，昭和45，47年度には，文部省科学研究費（海外学術調査）により，チベット研究委員会のメンバーから成る東洋文庫チベット文献調査隊（研究課題：「インド・シッキム・ブータン・ネパールにおけるチベット文献の調査と収集」）を派遣し，*sgrub thabs kun btus*. 「成就作法集成」，*rgyud sde kun btus*. 「タントラ部集成」，同 *maṇḍala, lam 'bras*. 「道果」，*rin chen gter mdzod* 「宝蔵」，*kong sprul gsung 'bum*. 「コンボ活仏全集」，ボン教関係文献等多数のチベット文献をマイクロ・フィルムに撮影するなどの手段により収集した。

昭和43～47年度における成果の刊行の主なものは次のようである。

The Complete Works of the Great Masters of the Sa skya Sect. Vol. 1～15,
東洋文庫，昭和43～44。

Title-Index to the Complete Works of the Great Masters of the Sa skya Sect.

東洋文庫，昭和45。

Catalogue of the Toyo Bunko Collection of Tibetan Works on History.

東洋文庫，昭和45。

iv 研究委員会

研究部の研究事業を企画実施する研究委員会は，5部門12研究委員会にわかれる。
昭和48年3月31日現在，研究委員会の常任委員は以下のとおりである。

第1部 中国研究

東亜考古学：梅原末治，小山 勲，関野 雄，渡辺兼庸

古代史：宇都木 章，河野六郎，後藤均平

唐代史（敦煌文献）：菊池英夫，鈴木 俊，竺沙雅章，土肥義和，藤枝 晃

宋代史：青山定雄，草野 靖，丹 喬二，中嶋 敏

明代史：田中正俊，鶴見尚弘，山根幸夫

近代中国：市古宙三，田中正俊，坂野正高，村松祐次，山根幸夫

第2部 近代日本研究

近代日本：岩生成一，田中時彦，鳥海 靖

亀井 孝，酒井憲二

第3部 東北アジア研究

満洲・蒙古（清代史）：榎 一雄，岡田英弘，神田信夫，松村 潤

朝鮮：長 正統，河野六郎，末松保和，田川孝三，森岡 康

第4部 中央アジア・イスラム・チベット研究

中央アジア・イスラム：榎 一雄，後藤 明，永田雄三，護 雅夫

チベット：榎 一雄，金子良太，川崎信定，北村 甫，ケツン・サンボ，祖南 洋，
山口瑞鳳

第5部 インド・東南アジア

南方史：荒 松雄，生田 滋，岩生成一，榎 一雄，辻 直四郎，仲田浩三，三根
谷 徹，山崎元一，山本達郎

2. 学 術 図 書 出 版

A. 東洋文庫論叢

周藤吉之『宋代史研究』昭和44年3月刊 A5判 748頁

原田淑人『唐代の服飾』昭和45年3月刊 B5判 336頁
辻 直四郎『現存ヤジュル・ヴェーダ文献』昭和45年3月刊 B5判 225頁
三根谷 徹『越南漢字音の研究』昭和47年3月刊 B5判 308頁
石田幹之助『東亞文化史叢考』昭和48年3月刊 A5判 915頁

B. 東洋文庫欧文紀要

Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko

- No. 26 1968年刊 B5判 100頁
- No. 27 1969年刊 B5判 166頁
- No. 28 1970年刊 B5判 100頁
- No. 29 1971年刊 B5判 84頁
- No. 30 1972年刊 B5判 124頁

C. 東洋文庫諸目録

Classified Catalogue of Books on Central Asia in the Toyo Bunko.

- 昭和43年5月刊 B5判 183頁
- 『藤井文庫目録』昭和44年3月刊 B5判 78頁
- 『東洋学報総目録(第1巻～第50巻) 附東洋協会調査部学術報告第1冊』
昭和44年7月刊 A5判 145頁
- A Classified Catalogue of Pamphlets Foreign Languages in the Toyo Bunko.
昭和47年度刊 B5判 328頁

D. 財団法人東洋文庫書報

- 『財団法人東洋文庫書報 第1号』昭和45年3月刊 A5判 80頁
- 『財団法人東洋文庫書報 第2号』昭和46年3月刊 A5判 80頁
- 『財団法人東洋文庫書報 第3号』昭和47年3月刊 A5判 80頁
- 『財団法人東洋文庫書報 第4号』昭和48年3月刊 A5判 94頁

E. 東洋文庫各種委員会刊行物

近代中国研究委員会

- 『「解放日報」記事目録Ⅲ』昭和43年10月刊 B5判 439頁
- 『近代中国研究センター彙報 No. 11』昭和43年5月刊 B5判 32頁
- 『近代中国研究センター彙報 No. 12』昭和43年12月刊 B5判 40頁
- 『東洋文庫別置東アジア関係欧文図書目録』昭和44年3月刊 B5判 248頁
- 『近代中国研究センター彙報 No. 13』昭和44年9月刊 B5判 32頁

『近代中国研究センター彙報 No. 14』昭和45年8月刊 B 5判 32頁
村松祐次『近代江南の租税—中国地主制の研究—』昭和45年8月刊 A 5判 808頁
『中国関係図書目録 (和文1957-1970)』昭和46年3月刊 B 5判 189頁
『東洋文庫近代中国研究室中文図書目録Ⅲ』昭和46年8月刊 B 5判 180頁
『近代中国研究センター彙報 No. 15』昭和46年10月刊 B 5判 36頁
山本澄子『中国キリスト教史研究』昭和47年12月刊 A 5判 400頁

宋史提要編纂協力委員会

『宋代研究文献目録Ⅲ』昭和45年刊 B 5判 94頁
『宋会要研究備考 (目録)』昭和45年刊 B 5判 120頁

敦煌文献研究委員会

『西域出土漢文文献分類目録Ⅲ スタイン将来大英博物館蔵敦煌文献分類目録 道教
之部』昭和44年3月刊 A 5判 103頁
『西域出土漢文文献分類目録Ⅳ 敦煌出土漢文文学文献分類目録—スタイン・ペリ
オ本—』昭和46年3月刊 B 5判 266頁

滿蒙史研究委員会

『鑲紅旗檔—雍正朝—』昭和47年3月刊 B 5判 122頁

チベット研究委員会

Catalogue of the Toyo Bunko Collection of Tibetan Works on History.
昭和45年刊 B 5判 259頁

チベット文献複製委員会

『サキヤ派全書集成 Vol. 1-15』自昭和43年至昭和44年 A 5判 均420頁
Vol. 1 The Complete Works of Kun-dga'-snying-po.
Vol. 2 The Complete Works of bsod-nams-rtse-mo.
Vol. 3-4 The Complete Works of Grags-pa-rgyal-mtshan.
Vol. 5 The Complete Works of Kun-dga'-rgyal-mtshan.
Vol. 6-7 The Complete Works of bLo-gros-rgyal-mtshan ('Phags pa).
Vol. 8 The Linguistic Works of Sa-bzang Ma-ti-pan chen, Rin-spungs-pa
-Ngag-dbang 'jig grags and Lo chen Ngag-dbang-chos-dpal.
Vol. 9-10 The Complete Works of Ngor-chen Kun-dga' bzang-po.
Vol. 11-15 The Complete Works of Kun-mkhyen bSod nams-seng-ge.
『模範緬華大辞典』昭和45年2月刊 A 5判 682頁

3. 講演会

昭和43年度

春期 (第217回～220回, 「南蛮文化の伝来について」連続講演)

岡本良知 「南蛮風俗の伝来時期」(5月8日), (5月15日), 「障屏画としての南蛮
地図屏風の成立」(5月22日), (5月29日)

秋期 (第221回～224回)

泉 靖一 「東京大学アンデス地帯学術調査団の十年」(10月16日)

川喜田二郎 「チベット文明とヒンドウ文明の比較研究について—前近代的文明
の諸問題—」(10月23日)

江上波夫 「東京大学イラク・イラン遺跡調査団の十年」(10月30日)

樋口隆康 「京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査について—ク
ジャン文化研究の国際的動向と京大の発掘—」(11月6日)

特別講演 I. H. クレシ 「近代国家としてのパキスタンの誕生」(10月25日)

W. N. ブラウン “The Power of Truth in Ancient Indian Belief” (2月28日)

昭和44年度

春期 (第225回～229回, 「東西文化の交渉—近代日本と大陸文化—」)

窪 徳忠 「道教と日本の庚申信仰」(5月7日)

麻生磯次 「江戸文学と中国文学」(5月14日)

阿部吉雄 「日本新儒学の発達と朝鮮との関係」(5月21日)

吉田光邦 「陶磁の技術とデザイン—日本の受け入れたもの—」(5月28日)

蓮見重康 「日本の水墨画に与えた中国の影響」(6月4日)

秋期 (第230回～233回, 「アジアとヨーロッパ—その思想的交流—」)

伊東俊太郎 「アリストテレスと東洋—特に日本との関係について—」(10月22日)

松井 透 「近代西欧のアジア観について」(10月29日)

平川祐弘 「西洋人が見た明朝シナの試験制度」(11月5日)

玉城康四郎 「西洋思想に対する仏教の特徴」(11月12日)

特別講演 梅原末治 「欧亚大陸北部を通じての東西文化交流」(10月31日)

昭和45年度

春期 (第234回～237回)

梅原末治 「殷王朝の墓制」(5月20日)

愛宕松男 「唐宋の間, 磁器産業の成立」(5月27日)

板野長八 「漢儒と道家の思想」(6月3日)

旗田 巍 「朝鮮の郡県制度」(6月10日)

秋期 (第238回～241回)

尾藤正英 「歴史思想における中国と日本—「大日本史」編纂の思想的背景—」(10月7日)

頼 惟勤 「江戸儒学における説文段注」(10月14日)

相良 亨 「日本儒学の特色」(10月21日)

梅原末治 「日本の史前時代における中国文化の波及」(10月28日)

昭和46年度

春期 (第242回～246回)

梅原末治 「上古畿内の状態と邪馬台国問題」(5月19日)

山田忠雄 「三代の校訂一和字正濫鈔の場合—」(5月26日)

榎 一雄 「モリソン文書について」(6月2日)

中島 敏 「慶元条法事類について」(6月9日)

田川孝三 「李氏朝鮮と出版文化」(6月16日)

秋期 (第247回～250回)

飯島 茂 「タイ国北部の山地民の生活—カレン族を中心に—」(10月6日)

光島 督 「ヒマラヤの僧院生活」(10月13日)

西川一三 「チベットの僧院生活」(10月20日)

石井米雄 「タイの僧院生活」(10月27日)

特別講演 サー・ハロルド・ベイレイ “Trends of Iranian Studies in Europe and America” (4月2日)

梅原末治 「上古における日韓の文化交流」(10月15日)

昭和47年度

春期 (第251回～254回)

池田 温 「中国古代券・契の諸相—トウルファン出土文書を中心として—」(5月17日)

山本達郎 「中国均田制の実施状況—敦煌文書にもとづいて—」(5月24日)

井ノ口泰淳 「中央アジア出土の仏典の種々相」(5月31日)

西村元佑 「中国均田制の問題点—吐魯番・敦煌出土文書を中心として—」(6月7日)

秋期 (第255回～258回)

田川孝三 「朝鮮李朝の地域社会について」(10月24日)

亀井 孝 「中華若木抄について」(10月31日)

天野元之助 「中国農業の史的展開」(11月7日)

中山八郎 「中国明初の儒臣—特に劉基を中心として—」(11月14日)

4. 研究会

昭和43年度

劉子健 「南宋政治新探—官僚化した独裁絶対君主，官僚主義および農民起義—」
(4月13日)

竺沙雅章 「東洋文庫所蔵三朝本『魏書』について」(5月18日)

土肥義和 「唐の戸令及び田令に関する若干の考察—現存敦煌戸籍の整理を中心として—」(6月22日)

G. ハザイ 「ハンガリーにおける東洋学研究—とくにトルコ学について—」(9月9日)

村松祐次 「魚鱗冊について」(9月21日)

池田 温 「盛唐の集賢院」(11月30日)

西 義郎 「ピュー(驃)に関する最近の論文」(21月21日)

亀井 孝 「古代日本語のサ行音をめぐって」(2月22日)

鶴見尚弘 「国立国会図書館所蔵康熙15年文量の長洲県魚鱗冊に関する一考察」(3月22日)

昭和44年度

山口瑞鳳 「女国と東女国」(4月26日)

金子良太 「張金山燃燈文について」(6月28日)

大谷森繁 「洪万宗とその文学—李朝文人の性格について—」(9月27日)

梅原末治 「梅原考古資料について」(10月28日)

岩崎富久男 「中国の教育革命について」(1月31日)

W. サイモン "Some linguistic problems in the study of Tibetan" (2月17日)

船越泰次 「両税法成立に関する性格論と原則論」(2月28日)

昭和45年度

永田雄三 「トルコ近代史に関する一考察—特にアーヤーンをめぐって—」
(4月25日)

長 正統 「路浮税について—釜山倭館倭債の一考察—」(7月18日)

徐先堯 「隋倭国交の問題点について」(10月17日)

梅原末治 「敦煌石室調査の由来とその出土品の所在について」(10月27日)

渡辺紘良 「宋代奴婢労働の形成—特に収養について—」(11月14日)

菊池英夫 「入唐求法僧将来唐代古文書について—円珍文書を中心に—」(12月12日)

昭和46年度

久村 因 「華陽国志の板本について」(4月24日)

サー・ハロルド＝ベイレイ “Expansion of Indian Culture into Central Asia”

(4月30日) 東方学会共催

松村 潤 「清朝の開国説話について」(6月19日)

アーネスト＝ヤング 「アメリカにおける最近の中国研究」(7月3日)

ヨーゼフ＝クライナー 「ウィーンにおける日本研究」(9月10日)

梅原末治 「東洋文庫へ寄贈せる梅原考古資料について」(10月16日)

ジャック＝ジェルネ 「フランス中国学の現状と動向」(11月11日) 東方学会共催

川崎信定 「チベット訳仏典にみられるインド教思想断片—清弁述『タルカジヴァーラー』第9章—」(12月21日)

神田信夫 「満洲国号考」(1月22日)

昭和47年度

草野 靖 「宋代古田村落における農民家産の零細化とこれに伴う二・三の問題」
(7月1日)

小山皓一郎 「アヒについて—中世アナトリアの都市商工ギルド—」(10月11日)

J. K. フェアバンク 「アメリカにおける中国および中国研究について」(11月22日)

トーマス＝ティロ 「ドイツ民主共和国科学アカデミー古代史考古学中央研究所に
おけるアジア研究の現状」(1月23日)

北村 甫 「インド・ネパールにおけるチベット文献の調査・収集」(2月3日)

5. 研究者養成

昭和43年度

【イスラム研究】後藤 明「マホメット時代のアラブ社会の考察」【ビルマ研究】西
義郎「ビルマ語の研究」

昭和44年度

【イスラム研究】後藤 明「マホメット時代のアラブ社会の考察」【チベット研究】
金子良太「西域出土チベット文献の研究」

昭和45年度

【朝鮮研究】長 正統「李朝後期の日鮮貿易史」【チベット研究】川崎信定「チベ
ット仏教古派資料の研究」【トルコ研究】永田雄三「トルコの近代化に関する社会経
済的研究」

昭和46年度

【朝鮮研究】長 正統「李朝後期の日鮮貿易史」【チベット研究】川崎信定「チベ

ット仏教古派資料の研究」【中国研究】渡辺紘良「宋代地主制の研究」

昭和47年度

【朝鮮研究】長 正統「李朝後期の日鮮貿易史」【チベット研究】川崎信定「チベット仏教古派資料の研究」【中国研究】二瓶幸子「アティーシャ著『菩提前燈論』の研究」(4.1~6.30), 土肥祐子「宋代における市舶制度の展開」(10.1~3.31).

6. 国内・国外研究者への便宜供与

日本学術振興会流動研究員・奨励研究員

昭和43年度

【流動研究員】池田 温(北海道大学助教授)〔課題〕「敦煌文献に基づく中国文化の総合的研究」。

昭和44年度

【流動研究員】大谷森繁(天理大学助教授)〔課題〕「東洋文庫所蔵朝鮮古文獻による史学・文学・語学の総合的研究」【外国流動研究員】Walter Simon(ロンドン大学名誉教授)〔課題〕「チベットの歴史と文化の系統」(期間: 45.2.1~4.14)【外国人奨励研究員】Gülçin Candarlioglu(イスタンブール大学助手)〔課題〕「20世紀におけるトルコ・日本・中国関係史」(期間: 44.10.1~45.9.30)

昭和45年度

【流動研究員】久村 因(名古屋大学教授)〔課題〕「中国歴代地理書の総合的研究」, 鶴見尚弘(山梨県立女子短期大学助教授)〔課題〕「宋代以降中国農村社会経済の研究」, 【奨励研究員】渡辺紘良〔課題〕「中国中世社会構造の研究—特に宋代における農民逃亡に関連して—」【外国人流動研究員】Harold Waller Bailey(ケンブリッジ大学名誉教授)〔課題〕「インド・イラン文献学」(期間: 46.3.27~5.7)

昭和46年度

【流動研究員】重田 徳(大阪市立大学助教授)〔課題〕「郷紳の研究」

昭和47年度

【流動研究員】草野 靖(熊本大学助教授)〔課題〕「宋代政治経済史の体系的研究」酒井憲二(山梨県立女子短期大学助教授)〔課題〕「本邦における漢字, なかんずく異体字の歴史的研究」【奨励研究員】小山皓一郎〔課題〕「オスマン朝初期の年代記とくにアシク・パシヤ・サーデ・ターリヒの研究」

国外研究者

昭和43年度

閔斗基 (崇実大学校教授), 李承旭 (檀国大学校副教授), 閔炳基 (高麗大学校亜細亜問題研究所日本研究部門科長), 崔鶴根 (ソウル大学校副教授 44年度まで), George Weys (ロンドン大学 44年度まで)。

昭和44年度

曹永和 (国立台湾大学図書館職員 45年度まで)。

昭和45年度

姜信沆 (成均館大学校副教授), 鄭良婉 (ソウル大学校教養課程部講師), 金容九 (ソウル大学校文理科大学講師 46年度まで)。

昭和46年度

宋敏 (聖心女子大学校副教授 47年度まで)。

昭和47年度

金榮禎 (梨花女子大学大学院長), 李男徳 (梨花女子大学教授文学博士), 沈雲龍 (中央研究院近代史研究所兼任研究員), 成百仁 (明知大学 副教授), 金文経 (崇田大学校副教授), 劉鳳翰 (中央研究院近代研究所), 陳存恭 (中央研究院近代史研究所), K. P. K. Whitaker (ロンドン大学)。

7. 職員の研究業績

略号: ①…著書 ②…編書 ③…論文 ④…学界動向 ⑤…書評・紹介

⑥…翻訳 ⑦…講演・研究発表 ⑧…その他(評論・雑記・座談会等)

青山定雄【昭和44年度】①『唐宋時代の交通と地誌 地図の研究』(再版, 吉川弘文館 1969年8月, 617頁)。【昭和46年度】⑦ “The New Bureaucrat of the Sung Dynasty with special reference to family” (Sung II Conference, Feldafing on the Starnbergersee, Germany, 28 Aug. ~ 3 Sep. 1971)。

生田 滋【昭和43年度】③「東南アジア研究における歴史学の役割」(東洋文化45, 56~70頁, 1968年), 「東南アジアにおけるイスラム」(『世界歴史シリーズ』9, イスラムの世界 96~101頁, 世界文化社, 1968年)。【昭和44年度】③「ポルトガルとインド洋」(『世界史シリーズ』14, 大探検時代, 177~187頁, 世界文化社, 1969年), 「マラッカから香料群島へ」(同上, 188~193頁), 「フランスのインドシナ半島

支配」(『世界歴史シリーズ』19, 植民地時代, 160~165頁, 世界文化社, 1969年), 「ゴア・マラッカ・マカオ」(『世界の旅』6, 大航海と新大陸, 173~180頁, 小学館, 1969年), 「マラッカ王国における国家権力形成の過程・史料批判の一試論」(山本達郎編『東南アジアにおける権力構造の史的考察』, 256~286頁, 竹内書店, 1969年), ⑥「ヘンドリック・ハメル著『朝鮮幽囚記』」(『東洋文庫』132, 平凡社, 1969年, 252頁)。【昭和45年度】③「鄭和の南海遠征」(『日本と世界の歴史』12, 15世紀, 244~249頁, 学習研究社, 1970年), 「大航海時代の東アジア」(榎一雄編『東亜文明の交流』5, 西欧文明と東アジア, 19~144頁, 平凡社, 1970年), ⑧「シンボジウム・東南アジアの文化」(梅棹忠夫, 石井米雄, 中村孝志と対談, エナジー26, 1~21頁, 1970年)(梅棹忠夫編『論集・日本の文化』講談社新書に再録)。【昭和47年度】⑤「J. レッグ著『スカルノ・政治的評伝』」(『東洋学報』55-2, 101~107頁, 1972年), ⑦「エレミヤス・ファン・フリート著『シャム王国の過去に関する短い記述』について」(史学会第70回大会東洋史部会, 1972年11月12日, 要旨, 史学雑誌81-12, 90頁, 1972年)。

市古宙三【昭和46年度】①『近代中国の政治と社会』(東京大学出版会, 1971年10月, 506頁)。【昭和47年度】⑥「J. K. フェアバンク著『中国』上・下」(東京大学出版会, 1972年9月, 244頁, 539頁)。

岩生成一【昭和43年度】⑥「リンスホーテン著『東方案内記』」(『大航海時代叢書』VIII, 岩波書店, 1968年9月)。【昭和44年度】③「ジャカルタ文書館の公証人役場文書について」(『日本古文学』2, 1~18頁, 1969年3月), 「オランダ史料から見た江戸時代初期西洋医学の発達」(『日本学士院紀要』26, 157~173頁, 1969年11月)。【昭和45年度】③「長崎出身ジャカルタ移住日本人 村上武左衛門の遺言状」(『法政史学』22, 1~13頁, 1970年3月), “Japanese Emigrants in Batavia during the 17th Century” (Acta Asiatica Vol. 18, pp. 1~25, Sep. 1970), 「オランダ・イギリス両国人の初期探險航海とその研究資料」(『大航海時代叢書』別巻, 岩波書店, 173~205頁, 1970年10月)。【昭和46年度】③“Cultural and Commercial Relations between Japan and the Netherlands in the Tokugawa Period” (蘭学と日本文化, 30~38頁, 1971年3月)。【昭和47年度】③「史伝ジャカタラお春」(日蘭協会講演, 1~14頁, 1972年10月), 「日本南方往復書翰(補遺)」(『南方史学』1, 62~85頁, 1972年11月), 「ツューンベリー研究資料(補遺)」(『東方学会創立二十五周年東方学論集』67~78頁, 1972年12月), ⑥『ヤーリス日本渡航記・ウィルマン日本滞在記』(村川堅固・尾崎 義訳, 岩生校訂, 1972年2月)。

宇都木 章【昭和44年度】③「春秋時代の宋の貴族」(『古代学』16-1, 44~55頁, 古代学協会, 1969年8月), ⑧「周の封建制」(『日本と世界の歴史』3, 古代, 72~77頁,

学習研究社, 1969年12月), 「春秋貴族の活動」(同上90~93頁), ③「鄭の七穆」(『中国古代史研究』3, 87~111頁, 吉川弘文館, 1969年11月), 「墨子の大人について」(青山史学 創刊号, 46~58頁, 青山学院大学史学科研究室, 1970年3月)。

【昭和47年度】③「斉の桓公の即位と莒国」(『山本博士還暦記念東洋史論叢』, 51~67頁, 山川出版, 1972年12月)。

梅原末治 【昭和43年度】①『宮崎県古跡調査報告』10 (浜田博士共著, 宮崎県刊), ③「戦国時代の古鏡」(故宮季刊2-4, 中華民国刊), 「上古の蟬形珠玉の新資料」(史林51-2), 「戦国時代の銀錯鉄壺, 魏晉時代の龍虎蓮華紋銅壺と金造耳飾」(『慶祝蔣復璁七十七論文集』及故宮季刊3-3), 「新たに知られた二面の螺鈿鏡」(史迹と美術39-1), 「押出し釈迦誕生摩耶夫人紋女像」(史迹と美術38-9)。【昭和45年度】①『持田古墳群』(宮崎県教育委員会刊行), ③「新知見の南都西大寺出土と伝える貼銀背海獸葡萄鏡附鹿鈕雲龍紋蓮花形鏡」(史迹と美術39-4)。【昭和45年度】③「史前の玦状耳飾についての所見」(『小葉田教授退官記念国史論集』), 「奈良時代の二・三の芸術工芸品—葡萄紋長頸壺と玉石器—」(史迹と美術39-6), 「上古の禽獸魚形勾玉—補説附史前の大珠について」(史学42-1), 「福岡県山鹿貝塚出土の鏤節形大珠」(九州考古学37), 「九州における中国史前の黒陶系の土器」(史林52-2), 「戦国韓国における仏塔舍利具の諸相」(史迹と美術29-9)。【昭和46年度】①『新修泉屋清賞』(泉屋博古館刊), ③「山城大枝の奈良時代の古墓」(史迹と美術41-8), 「中国古銅器通論」(『慶祝王世杰先生八十歳論集』中央研究院歷史語言研究所集刊)。【昭和47年度】①『日本古玉器雜攷』(吉川弘文館刊), ③「肥後江田船山古墳と筑後岩戸山に遺存の石造品」(史迹と美術43-1), 「縄文式時代における高度の青銅文化の伝播」(『東方学会創立二十五周年記念東方学論集』)。

榎 一雄【昭和43年度】③「月氏の副王謝—クシャン王朝年代論に対する一臆説—」(オリエンツ10-3・4, 1~15頁), “Hsieh 謝, Fu-Wang 副王 or Wang 王 of the Yüeh-shih. A Contribution to the Chronology of the Kushans.” (Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 26, pp. 1~3), 「ある中国知識人の生涯—容閔と嚴復との場合—」(『日本をみつめるために』日本女子大学教養特別講義3集, 313~338頁), 「ある中国知識人の生涯—容閔と嚴復との場合—」(日本女子大通信238号, 2~13頁), ⑧「藤芳義男著『倭日の国—邪馬台女王国の解明』序文」(東京桃源社刊, 桃源選書), 「桑原博士と東洋学」(桑原隲藏全集月報5, 7~9頁), 「盗作の問題」(あかれんが30号, 1~3頁)。【昭和44年度】①「標準高等世界史〈B〉改訂版」(堀米庸三と共著, 講談社, 307頁), ②「同上指導資料」(監修, 講談社, 507頁) ③「梁職貢図の流伝について」(『鎌田博士還暦記念論文集』, 132~146頁), 「その後の邪馬台国」(国学院日本文化研究所紀要23輯, 169~184頁), “On

the Date of the Kidarites (1)” (Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 27, pp. 1~26, Addenda et Corrigenda pp. 1~2), “El Intercambio cultural de Asia” (Asia. Anuario. Centro de Estudios Orientales. Primera edición 1968, pp. 9~24), ⑤「メキシコの東洋学研究の二雑誌」(東洋学報52-3, 125~135頁), ⑧「マックリーヴェ氏の訃」(東洋学報52-2, 127~134頁), 「薛峯記念館の設立に寄せて」(晩晴5, 23~25頁), 「東洋現代史雑感1・2 (G. E. モリソンの紹介)」(月刊教育18-22, 1~2, 7頁, 月刊教育18-25, 1~3頁), 「東洋文庫と丸善」(学燈66-1, 丸善創業100年記念特集号, 138~147頁)。【昭和45年度】①『邪馬台国』(増補版, 東京至文堂, 246頁), ③「梁職貢図に関する攻瑰集の記事について」(オリエント11-1・2, 31~32頁), “The Liang chih-kung-t'u on the origin and migration of the Hua or Ephthalites.” (The Journal of the Oriental Society of Australia, Vol. 7, Nos. 1 & 2, pp. 37~45), “On the Date of the Kidarites (2)” (Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 28, pp. 13~38)。【昭和46年度】③「中央アジア・オアシス都市国家の性格」(『岩波講座・世界歴史』6, 327~358頁), 「ミッチェル図書館所蔵のモリソン文書について」(東洋文庫書報2, 1~36頁), ⑧「一種の公害」(自由12, 114頁), 「日本人の海外紀行文の傑作—入唐求法巡礼行記—」(Energy 8-1, p. 43), 「オーストラリアの東洋学研究とモリソン文書」(東方学会報19, 4~5頁), 「フルフォードのこと」(毎日新聞夕刊2月16日), 「社会の健康と個人の健康」(健康1971年12月, 2~3頁), 「大唐西域記の新訳に寄せて」(中国古典文学大系月報48, 1~3頁), 「財団法人東洋文庫理事長細川護立氏に対する弔辞『老松町の殿様』」(石田茂作編, 法隆寺刊)。【昭和47年度】③「プトレマイオスに見えるイセドネス民族について」(『山本博士還暦記念東洋史論叢』, 69~80頁), 「日本国家成立に関する記紀の信憑性」(高等裁判所昭和45年(行)コ第53号鑑定書, 101頁), 「日本国家成立に関する記紀の信憑性に係る鑑定書」(教育委員会月報264, 110~158頁), 「日本国家成立に関する記紀の憑性—家永教科書裁判における鑑定書—」(神道史研究20-3, 2~61頁), “Tsung-lé's Mission to the Western Regions in 1378~1382” (Oriens Extremus, 19, Jahrgang, Heft 1, S. 47-53), 「傳安の西域奉使について」(『東方学会創立25周年記念東方学論信集』189~200頁), “Sur la date des Kidarites” (Nichifutsu Bunka. 日仏文化 No. 28 Revue de Collaboration Culturelle Franco-Japonaise. pp. 45~57), 「モリソン文書について」(UP 5: 1973. 3. 5, 12~18頁), 「サンタエリアのスペイン語訳マルコ・ポーロ (1518年刊) について」(クラシカ・ヤポニカ第3次東西交渉史関係古書複印の広告文, 雄松堂刊), ⑤「T. E. ロレンス著『知恵の七柱』」(読書人922), 「本との出会い」(毎日新聞9月11日), ⑦「東洋史上より見たる古代日本—教科書裁判における鑑定書—」(教育月報115, 2~5頁, 同116, 2~4頁), ⑧「『山

本博士還暦記念東洋史論叢』序文,「永井義憲著『大宇宙の興茫は此一書にあり』序文」(久保田氏刊,10月),「続社会の健康と個人の健康」(健康,38~39頁,1972年11月),「新しい年をこう考える」(月刊教育22-1,1~2,5頁),「濫授褒章時代」(大法輪40-1,36頁)。

岡田英弘【昭和43年度】④「第5回野尻湖クリルタイ」(アジア・アフリカ言語文化研究2,東京外大AA研,1969年3月,7頁),⑧「永楽帝の母」(朝日新聞1968年5月10日夕刊)。【昭和44年度】④「第6回野尻湖クリルタイ」(アジア・アフリカ言語文化研究3,東京外大AA研,1970年3月,7頁)。【昭和45年度】③「チンギス・ハーン崇拜とモンゴル文学」(歴史と地理182,山川出版社,2頁),「北元奉祀聖母瑪利亞攷」(国立政治大学辺政研究所年報1,国立政治大学,1970年,7頁),⑧「邪馬台国は中国の一部だった」(諸君ノ2-9,文芸春秋社,1970年9月,11頁),「採生折割の話」(中国古典文学大系月報39,平凡社,3頁),【昭和46年度】③「清太宗継位考実」(故宮文献3-2,国立故宮博物院,1972年3月,7頁),「王陽明の場合」(諸君ノ3-4,文芸春秋社,1971年4月,4頁),「一華僑から日本人へ」(諸君ノ3-9,文芸春秋社,1971年9月,8頁),「周恩来 その虚像と実像」(諸君ノ3-10,文芸春秋社,1971年10月,10頁),「嵐の中の中華民国」(諸君ノ3-11,文芸春秋社,1971年11月,20頁),「中国を解く鍵 人民解放軍」(諸君ノ3-12,文芸春秋社,1971年12月,9頁),「毛沢東の冒険」(諸君ノ4-1,文芸春秋社,1972年1月,23頁),「毛沢東 ついに林彪に勝つ」(世界経済27-1,世界経済調査会,1972年1月,8頁),「女性的日本人への警告」(諸君ノ4-3,文芸春秋社,1972年3月,6頁)。【昭和47年度】③“The Secret History of the Mongols, a pseudo-historical novel”(アジア・アフリカ言語文化研究5,AA研,1972年8月,7頁),“Outer Mongolia in the sixteenth and seventeenth centuries.”(同上,17頁),「清の太宗嗣立の事情」(『山本博士還暦記念東洋史論叢』,山川出版社,1972年10月,11頁),④「第4回東亞アルタイ学会」(創文109,創文社,1972年6月,6頁),⑧「かくして北京は屈服した」(諸君ノ4-5,文芸春秋社,1972年5月,16頁),「蔣経国氏が言い残したこと」(文芸春秋50-14,1972年11月,6頁)。

長 正統【昭和43年度】②『幕末における対馬と英露』(日野清三郎著,東京大学出版会,1968年12月,344頁),③「武家政権と朝鮮王国」(井上秀雄・上田正昭共編『日本と朝鮮の二千年Ⅰ』,209~247頁,太平出版社,1969年2月),⑧「中世日鮮貿易史研究についての一感想」(朝鮮史研究会々報20,11~12頁,朝鮮史研究会,1968年5月)。【昭和45年度】③「肅宗癸亥制札の第二条についての一考察」(『朴元杓先生回甲記念・釜山史研究論叢』,59~74頁,韓国釜山,1970年11月),「路浮税考」(朝鮮学報58輯,1~20頁,朝鮮学会,1971年1月),⑤「金柄夏著『李朝前期対日

貿易史研究』(朝鮮学報55輯, 83~85頁, 朝鮮学会, 1970年4月)。【昭和46年度】
②『セミナー日本と朝鮮の歴史』(井上秀雄・秋定嘉和共編著, 120~139頁, 164~165頁, 182~191頁, 東出版社, 1972年1月), ⑤「韓国日本問題研究会編『朝鮮外交事務書』(東洋学報54-1, 109~113頁, 1971年6月), 「田鳳徳著・渡辺学・李丙誅訳『李朝法制史』(史学雑誌80-9, 76~83頁, 1971年9月)。

亀井 孝【昭和46年度】①『日本語学のために』論文集第1 (吉川弘文館, 1971年6月)。

川崎信定【昭和45年度】⑦「ダラムサーラとその周辺」(第18回日本西藏学会大会, 1970年12月6日, 於大谷大学)。【昭和46年度】④「1970年の歴史学界—回顧と展望(チベット学)」(史学雑誌80-5, 253-255頁, 1971年5月), ⑤「レッシング・ウェイマン共訳『ケトプジェ・仏教タントラ概説』(東洋学報54-3, 124~127頁, 1971年12月), ⑦「チベット訳仏典にみられるインド思想断片—清弁造・『タルカジヴァーラー』第9章—」(東洋文庫談話会, 1971年12月21日)。【昭和47年度】③「チベット仏教の展開」(東洋学術研究12-1, 55~69頁, 昭和48年春季号), ④「1971年の歴史学界—回顧と展望—(チベット学)」(史学雑誌81-5, 247~249頁, 1972年5月)。

神田信夫【昭和43年度】①『紫禁城の栄光』(松村潤・岡田英弘共著「大世界史」11, 文芸春秋, 1968年4月, 349頁) ③“Present State of Preservation of Manchu Literature”(Memoires of the Research Department of the Toyo Bunko 26, pp. 63~95, 東洋文庫, 1968年), ⑤「傳宗懋著『清代軍機処組織及職掌之研究』(東洋学報51-2, 68~72頁, 東洋学術協会, 1968年9月), ⑦「台湾現存満文史料—満文原檔を中心に—」(北海道大学東洋史談話会, 1968年9月21日), 「アジア史の再検討」(アジア文化研究会, 1968年12月14日), ⑧「清朝史への熱意に感嘆」(朝日新聞「研究ノート」, 1968年5月14日夕刊), 「大帝康熙」(NHKラジオ学校放送高等学校昭和43年度2学期, 32頁, 日本放送出版協会, 1968年9月)。【昭和44年度】②『白鳥庫吉全集』3 (岩波書店, 1970年3月, 882頁), ⑦“Shen Ch'i-liang and his works on the Manchu Language”(The Third East Asian Altaistic Conference, Taipei, 20 Aug. 1969), ⑧「征服王朝—雍正帝—」(NHKラジオ学校放送高等学校昭和44年度2学期, 日本放送出版協会, 1969年9月), 「康熙帝と乾隆帝」(東京新聞サンデー版「世界の歴史」1970年2月1日)。【昭和45年度】②『白鳥庫吉全集』5 (岩波書店, 1970年9月, 521頁), ③“Shen Ch'i-liang and his works on the Manchu Language”(Proceedings of the third East Asian Altaistic Conference pp. 129~143 Taipei, April 1970), ⑤「故宮文献第一卷第一期・第二期」(東洋学報53-1, 83~86頁, 1970年6月), ⑧「17世紀のアジア」(『日本と世界の歴史』14,

217～223頁, 学習研究社, 1970年10月), 「満州朝廷北京に入る」(『日本と世界の歴史』14, 242～247頁, 学習研究社, 1970年10月), 「百二十老人語録のことども」(岩波講座・世界歴史月報21, 4～6頁, 1971年1月)。【昭和46年度】③「旧満洲槽と天聰九年槽について」(『東洋文庫書報』3, 1～12頁, 1972年3月), ⑤「佐々木正哉著『清末の秘密結社(前篇)』」(『駿台史学』30, 178～182頁, 駿台史学会, 1972年3月), ⑥「勿吉・靺鞨伝(魏書・隋書・北史・旧唐書・新唐書)」(『騎馬民族史Ⅰ・正史北狄伝』, 341～363頁, 平凡社, 1971年10月), 『旧満洲槽天聰九年Ⅰ』(松村潤・岡田英弘共訳註, 東洋文庫, 1972年3月, 161頁), 『鑲紅旗槽—雍正朝—』(松村潤・岡田英弘・細谷良夫共編・訳註, 東洋文庫, 1972年3月, 119頁), “The Role of San-fan in the Local Politics of Early Ch'ing” (The Conference on Local Control and Social Protest during the Ch'ing Period, Honolulu, 28 June 1971) “The National Name ‘Manju’” (The Fourth East Asian Altaistic Conference, Taipei 29 Dec. 1971), 「満洲国号考」(東洋文庫談話会, 1972年1月22日)。【昭和47年度】③「満洲(Manju)国号考」(『山本博士還暦記念東洋史論叢』, 155～166頁, 山川出版社, 1972年10月), 「清朝の国史列伝と式臣伝」(『東方学会創立二十五周年記念東方学論集』, 275～291頁, 東方学会, 1972年12月), ⑦「アメリカの大学図書館等を見学して」(全国図書館大会大学図書館部会, 1972年11月30日)。

菊池英夫【昭和43年度】③「太湖周辺の旧地主庄園・その三」(山梨大学教育学部研究報告19, 1～10頁, 1969年3月), ④「1967年の歴史学界—回顧と展望—東洋史・中国・隋唐」(『史学雑誌』77-5, 213～221頁, 1968年5月), ⑧「路傍の遺跡(唐末五代宋)」(『大世界史』8付録, 旅, 6～8頁, 文芸春秋社, 1968年4月)。【昭和44年度】③「西域出土文書を通じてみたる唐玄宗時代における府兵制の運用(上・下)」(『東洋学報』52-3, 22～53頁, 同52-4, 52～101頁, 1969年12月, 1970年3月), 「南朝田制に関する一考察—唐田令体系との関連において—」(山梨大学教育学部紀要4, 1～44頁, 1970年3月), 「太湖周辺の旧地主庄園・その四」(山梨大学教育学部研究報告20, 50～58頁, 1970年3月), ④「五代・宋代史研究(1963～67)」(『日本における歴史学の発達と現状Ⅲ』第二部東洋史第1章中国Ⅳ-1, 第13回国際歴史学会議(モスクワ)提出報告書(日・英文), 国際歴史学会議日本国内委員会編, 321～326頁, 332～338頁, 東大出版会, 1969年9月), 「史学革命」(『講座現代中国』Ⅲ文化大革命, 217～242頁, 大修館, 1969年9月)。【昭和45年度】③「府兵制の展開」(『岩波講座・世界歴史』5, 407～439頁, 1970年9月), 「太湖周辺の旧地主庄園・その五」(山梨大学教育学部研究報告21, 31～39頁, 1971年3月)。【昭和46年度】③「太湖周辺の旧地主庄園・その六」(山梨大学教育学部研究報告22, 77～87頁, 1972年3月), 「中国軍制史研究の基本的視点—封建制研究への一つのアプローチ—」(『歴史評論』250, 116～133頁, 校倉書房, 1971年5月), ④「1970年の歴史学会—回顧と

展望—東洋史・魏晉南北朝」(史学雑誌80-5, 189~197頁, 1971年5月), ⑧「強制連行の歴史」(アジア・レビュー, 1970-4 冬季号, 研究談話室・交流ノート, 159頁, 朝日新聞社, 1971年12月)。【昭和47年度】③「唐令復原研究序説—特に戸令・田令にふれて—」(東洋史研究31-4, 85~122頁, 1973年3月), 「唐代史料における令文と詔勅文との関係について—唐令復原研究序説の一章—」(北海道大学文学部紀要21-1, 35~57頁, 1973年2月), ⑧「歴史研究と歴史教育」その一(北大史学会会報史筵3, 7~11頁, 1973年2月)。

北村 甫【昭和43年度】⑦『五体清文鑑』のチベット語について—中間報告1—」(日本西藏学会大会, 於京都大学羽田記念館, 1968年11月), 「五体清文鑑」のチベット語について—中間報告2—」(東京外大 AA 研所内研究会, 1968年12月)。【昭和44年度】①『チベット語会話篇(案)』(ユネスコ東アジア文化研究センター, 1969年7月, 109頁), ⑦「チベット語の発音と文字のテキストについて」(東京外大 AA 研所内研究会, 1969年11月), 「チベット語ラサ方言の動詞の形態」(日本西藏学会大会, 於東洋文庫, 1969年12月)。【昭和45年度】「インドにおけるチベット人の文献複製について」(日本西藏学会々報17, 5~6頁, 1971年3月)。【昭和47年度】⑦「インド・ネパールにおけるチベット文献の調査と収集」(東洋文庫談話会, 1973年2月), ⑧「東洋文庫チベット文献調査隊について」(日本西藏学会々報19, 8頁, 1973年3月)。

草野 靖【昭和43年度】④「宋代官田の経営類型」(日本女子大学紀要・文学部18, 42~67頁, 1969年3月), ⑤「斯波義信著『宋代商業史研究』」(社会経済史学34-5, 61~65頁, 1969年1月), ⑦「宋代官田における佃権と割佃」(第31回東洋史談話会大会, 1968年11月3日, 於京都大学)。【昭和44年度】③「宋代官田の租種管業」(東洋史研究28-1, 1~27頁, 1969年6月), 「宋代民田の佃作形態」(史艸10, 12~112頁, 日本女子大学史学研究会, 1969年10月), 「宋代の頑佃抗租と佃戸の法身分」(史学雑誌78-11, 1~35頁, 1969年11月), 「大土地所有と佃戸制の展開」(『岩波講座・世界歴史』9, 345~382頁, 1970年2月)。【昭和45年度】③「宋元時代の水利用開発と一田両主慣行の萌芽」(上)(下)(東洋学報53-1, 42~77頁, 同53-2, 46~79頁, 1970年6月, 9月), 「宋代の割佃」(史艸11, 1~39頁, 日本女子大学史学研究会, 1970年10月), 「南宋文献に見える田骨・田根・田祖・田底」(法文論叢28, 54~81頁, 熊本大学法文学会, 1971年1月)。【昭和47年度】③「宋代合種制補考」(東洋学報55-1, 35~67頁, 1972年6月), 「唐宋時代における農田の存在形態—古田と新田—(上)」(法文論叢31, 78~105頁, 熊本大学法文学会, 1972年12月), ⑤「丹喬二氏『宋代の佃戸制をめぐる諸問題—草野説の検討を中心に—』を読む」(史艸13, 137~173頁, 日本女子大学史学研究会, 1972年11月)。

河野六郎【昭和43年度】①『朝鮮漢字音の研究』(天理時報社印刷, 1968年9月, 448頁), ③『朝鮮の漢文』(中国, 8~17頁, 1968年4月), 「アルファベットの発生」(『世界の文化史蹟』2, オリエントの廃墟, 152頁, 講談社, 1968年12月)。【昭和44年度】“The Chinese Writing and its Influences on the Scripts of the Neighbouring Peoples” (Memoirs the Research Department of the Toyo Bunko No. 27, pp. 83~140, 1969年)。【昭和45年度】③『中国語・朝鮮語』(『言語の系統と歴史』, 303~322頁, 岩波書店, 1971年2月)。【昭和46年度】③『朝鮮語の膠着性について』(言語学論叢11, 49~56頁, 東京教育大学言語学研究会, 1971年9月)。

後藤 晃【昭和43年度】⑤「バーナード・ルイス著, 林武・山上元孝訳『アラブの歴史』」(史学雑誌77-4, 95~96頁, 1968年4月), 「嶋田襄平著『預言者マホメット』」(イスラム世界6, 66~71頁, 日本イスラム協会, 1968年5月), 「ハミルトン・ギブ著, 加賀谷寛・内記良一・中岡三益・林武訳『イスラーム文明史—政治・宗教・文学にわたる七章』」(史学雑誌78-3, 93~94頁, 1969年3月)。【昭和45年度】③「イスラム勃興期のアラブ社会の構造—1—血縁集団内の非血縁分子の性格と血縁集団について」(イスラム世界7, 15~33頁, 日本イスラム協会, 1970年4月)。【昭和46年度】③「アラブ戦士集団の成立」(歴史学研究382, 1~15頁, 1972年3月), ⑤「モントゴメリー・ワット著, 牧野信也・久保儀明訳『ムハンマド〔マホメット〕・預言者と政治家』」(史学雑誌80-4, 95~96頁, 1971年4月), ⑦「マホメットの外交交書」(史学会, 1971年11月14日)。【昭和47年度】⑤「山田信夫編『ペルシアと唐』」(史学雑誌81-4, 97~98頁, 1972年4月), ⑦「アラブ部族社会とイスラム」(イスラム化研究会, 1972年12月10日)。

佐伯 富【昭和43年度】③「清代における坐省の家人」(『田村博士頌寿東洋史論叢』13頁, 田村博士退官記念事業会, 1968年5月), 「清代の侍衛について—君主独裁権研究の一齣—」(東洋史研究27-2, 21頁, 1968年10月), ⑧「産業の発達と専売制度・銀 中国文化の成熟」(『世界歴史シリーズ』13, 20頁, 世界文化社, 1969年3月)。【昭和44年度】①『中国史研究』1. (『東洋史研究叢刊』21-1, 724頁, 東洋史研究会, 1969年5月), ②『宋代文集索引』(共編, 東洋史研究叢24, 873頁, 東洋史研究会, 1970年3月), ③「東アジア世界の展開・総説」(『岩波講座・世界歴史』9, 16頁, 1970年2月), 「宋朝集権官僚制の成立」(『岩波講座・世界歴史』9, 34頁, 1970年2月), ⑧「矢野先生の思い出」(東洋史研究28-4, 3頁, 1970年3月)。【昭和45年度】③「清代雍正朝における養廉銀の研究—地方財政の成立をめぐる(一)—」(東洋史研究29-1, 31頁, 1970年6月), 「同上(二)」(東洋史研究29-2, 62頁, 1970年12月), 「同上(三)」(東洋史研究29-3, 40頁, 1972年3月), 「清代新疆における玉石問題」(史林53-5, 28頁, 史学研究会, 1970年9月), ⑧「王安石の

登場—近世社会成立期の变革者—」(『日本と世界の歴史』8, 14頁, 学習研究社, 1970年5月), 「征服者の自覚—雍正帝の中国人教化と独裁制の確立—」(『日本と世界の歴史』15, 6頁, 学習研究社, 1970年11月), 「清代経済の繁栄—国家財政の充実と揚州塩商の活躍—」(『日本と世界の歴史』15, 6頁, 学習研究社, 1970年11月), 「安部博士のことども」(創文92, 2頁, 創文社, 1971年1月)。【昭和46年度】①『中国史研究』2(『東洋史研究叢刊』21-2, 845頁, 1971年10月), ②『古今類書纂要索引』(古今類書纂要, 304頁, 中文出版社, 1972年3月), ③「那波先生の思ひ出」(史窓30, 2頁, 京都女子大学, 1971年10月)。【昭和47年度】③「清代塞外における山西商人」(『東方学会創立25周年記念東方学論集』15頁, 1972年12月)。

末松保和【昭和43年度】⑦「日本史から見た朝鮮半島」(霞山会「朝鮮講座」講演, 1968年6月22日)。【昭和44年度】③「李朝の革命の一考察」(学習院史学6, 9頁, 1969年12月), ⑧「李氏朝鮮王国」(東京新聞, 1970年2月22日), 「白鳥先生の最終講義のことなど」(『白鳥庫吉全集』3, 附録月報3, 1970年3月)。【昭和45年度】②『朝鮮研究文献目録』1868~1945, 単行書篇, 上・中・下, 編著者名索引(東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター叢刊第7~9・12, 1970年11月, 507+44頁), ⑧「李氏朝鮮の建国」(『日本と世界の歴史』12, 6頁, 学習研究社, 1970年7月)。【昭和46年度】②『朝鮮研究文献目録』1868~1945, 論文, 記事篇1~3(東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター叢刊第15~12, 853頁, 1972年3月), ⑦「韓辺外と高句麗の起りについて」(日本大学史学会総会講演, 1971年10月23日), 「高句麗広開土王陵碑について」(日本書紀研究会例会講演, 1971年11月20日)。【昭和47年度】⑦「高句麗広開土王陵碑文をめぐって」(日本書紀研究会例会講演, 1972年12月22日)。

周藤吉之【昭和45年度】③「王安石の青苗法の起源について」(東洋学報53-2, 133~177頁, 1970年9月)。【昭和46年度】③「王安石の青苗法の施行過程(一)」(東洋大学大学院紀要8, 171~199頁, 1972年3月)。【昭和47年度】③「北宋末・南宋初朝の私債および私租の減免政策」(東洋大学大学院紀要9, 113~162頁, 1973年2月)。

鈴木 俊【昭和47年度】③「唐の戸等と税役」(『東方学会創立二十五周年記念東方学論集』, 425~431頁, 東方学会, 1972年12月), ⑧「高校世界史の授業について」(歴史と地理71, 山川出版社, 1972年), 「『元号』の制定は是か非か」(サンケイ新聞, 1973年3月25日)。

関野 雄【昭和43年度】③“Neolithic, Yin and Chou-Arts of the Peasant and Aristocrat”(Arts of China-Neolithic Cultures to the T'ang Dynasty-Recent Discoveries, Kodansha International Ltd., Tokyo, Japan & Palo Alto, Calif., U.S.

A., 1968, pp. 13~20), ④「新中国考古学関係文献提要」(史学雑誌78-2, 73~79頁, 1969年2月), ⑦「漢代画像の世界」(『史学会第67回大会プログラム』15~16頁, 1968年11月), ⑧「『考古学』と『発掘』」(言語生活201, 56~57頁, 筑摩書房, 1968年6月)。【昭和44年度】③「黄河文明の序幕—はるかな華北の先史時代」(『日本と世界の歴史』3, 48~53頁, 学習研究社, 1969年12月), ⑧「中国の古墓と副葬品」(『世界の文化史蹟』7, 205頁, 講談社, 1969年12月)。【昭和45年度】③「黄河文明の形成」(『岩波講座・世界歴史』4, 21~47頁, 1970年5月), 「金餅考—戦国・秦漢の金貨に関する一考察」(東洋文化研究所紀要53, 1~88頁, 1971年2月), 「実験は解明の鍵」(考古学ジャーナル50, 1頁, 1970年11月)。【昭和46年度】①『常呂——北海道サロマ湖沿岸・常呂川下流域における遺跡調査』(執筆分担, 東京大学文学部, 1972年3月, 本文569頁, 図版129頁, 地図18), 『中国考古学研究』3版(東京大学出版会, 1972年3月, 751頁), ⑤「長沙瀏城橋の楚墓—中国考古学界の新収穫」(日中文化交流177, 13~15頁, 日本中国文化交流協会, 1972年2月), ⑦「輝県大墓の被葬者について」(『史学会第69回大会プログラム』, 7~8頁, 1971年11月), 「中国考古学, 20年の歩み」(史学雑誌80-12, 73~75頁, 1971年12月), ⑧「東京大学考古学研究室」(東方学会報20, 6~7頁, 1971年7月), 「研究者交流の復活を一期待される中国考古学の発展」(北日本新聞, 1971年10月1日朝刊等)。【昭和47年度】③「千八百年前の地震計」(歴史と地理203, 32~33頁, 山川出版社, 1972年8月), 「張衡の候風地動儀における都柱の復原」(『東方学会創立二十五周年記念東方学論集』, 433~449頁, 1972年12月), ④「中国考古学界の躍進—『定陵展』の開催に寄せて」(日本と中国, 1973年1月1日号, 日本中国友好協会(正統)中央本部), 「躍進著しい中国考古学界の成果」上・下(読売新聞, 1973年1月8・9日夕刊), 「新中国の考古学」(『定陵地下宮殿宝物展』, 43~48頁, 定陵展開催実行委員会, 1973年1月), 「中国考古学界の現状」(『日本の考古学』4, 付録1, 1~4頁, 河出書房新社, 1973年3月), ⑧「中国文化の奥深さ—発掘された二千年前の死体」(京都新聞, 1972年8月2日朝刊等), 「あざやか 古代中国文化—長沙古墳カラー写真 三氏の観察」(鈴木尚・宮川寅雄と座談, 朝日新聞, 1972年8月9日朝刊), 「世界の古代史解明に手掛かり—長沙古墳の語るもの」(江上波夫・米沢嘉圃と座談, 東京新聞, 1972年8月11日朝刊), 「二千年のタイム・カプセル—生き生きとよみがえった前漢初期の世界」(日本と中国, 1972年8月14日号), 「誇り高き楚文化の精粹—漢墓発掘の意義」(週刊朝日 77-38, 80~84頁, 1972年9月), 「中国の文化財行政」(同上84~85頁), 「墓泥棒ものがたり」(同上156~158頁), 「関於『定陵地下宮殿展』」(香港大公報1973年1月11日号)。

祖南 洋【昭和46年度】⑦「サキヤ派資料に基づく秘密部經典の分類」(日本西藏学

会，日本西藏学会々報18，1971年11月）。

田川孝三【昭和44年度】⑦「世宗朝の文化」（韓国研究院，1969年），⑧「東洋文庫蔵朝鮮善本マイクロ・フィルム目録」Ⅱ（東洋文庫書報1，57～69頁，1970年3月）。

【昭和45年度】③「李氏朝鮮の動揺」（『日本と世界の歴史』18，276～279頁，学習研究社，1971年2月）。【昭和46年度】⑦「李朝の印刷文化」（東洋文庫東洋学講座，1971年6月），⑧「朝鮮本あれこれ」（歴史と地理189，20～22頁，山川出版社，1971年6月）。【昭和47年度】③「朝鮮本と鑄字」（書の手帖7，2～7頁，風塵社1972年4月），「李朝期の影幀・肖像画」（李朝期の影幀と民衆画，6頁，東京画廊，1972年10月），「郷案について」（『山本博士還暦記念東洋史論叢』，269～290頁，山川出版社，1972年10月），「李朝の印刷文化と日本」（東洋学Ⅱ，151～178頁，韓国檀国大学附設東洋学研究所，1972年12月），⑦「朝鮮本について」（昭和47年度漢籍担当職員講習会京都会場，1972年5月，於京都大学図書館），「李朝の地域社会」（東洋文庫東洋学講座，1972年10月）。

田中時彦【昭和43年度】③「西南戦争叛徒処分」他11件（我妻栄編『日本政治裁判史録』1，第1法規出版，1968年）。【昭和44年度】⑧「大津事件」ほか4件（同上2，1969年），「虎ノ門大逆事件」（同上3，1969年），「最近十年間における明治維新史研究の動向と問題点」（歴史学研究会編『明治維新史研究講座』別巻，平凡社，1969年6月）。【昭和45年度】③「政党政治挫折の環境」（東海大学紀要一政治経済学部2，1970年4月），「言論・文書戦の投票行動に及ぼした影響」（行動科学研究4—2，1971年2月），⑧「五・一五事件」（我妻栄編『日本政治裁判史録』4，1970年），「二・二六事件」（同上5，1970年）。【昭和46年度】③「政党政治挫折の環境（2）」（東海大学紀要一政治経済学部4，1972年3月），⑧「鉄道輸送」（日通総合研究所編『日本輸送史』日本評論社，1971年），「明治初期の行政制度」（東京都編『東京百年史』2，1972年3月），「三許法の制定と民会」（同上），「東京市の成立」（同上）。

立花孝全【昭和44年度】③「シナにおける空思想の理解」（印度学仏教学研究18-2，371～377頁，日本印度学仏教学会，1970年3月）。【昭和45年度】③“The Codes of chōsokabe Motochika and the Economy of Buddhist Temples in His Day (I)”（印度学仏教学研究19-1，459～464頁，日本印度学仏教学会，1970年12月），④「仏教学関係欧文雑誌内容目録（1969年8月～1970年7月）Ⅰ」（仏教文化2-1，85～97頁，東京大学仏教青年会，1970年10月）。【昭和46年度】③“The Codes of Chōsokabe Motochika and the Economy Buddhist Temples in His Day (II)”（印度学仏教学研究20-2，947～955頁，日本印度学仏教学会，1972年3月），④「仏教学関係欧文雑誌内容目録（1970年8月～1971年1月）Ⅱ」（仏教文化2-2，71～

77頁, 東京大学仏教青年会, 1971年6月), 「仏教学関係欧文雑誌内容目録(1971年2月~7月)Ⅲ」(仏教文化3-1, 66~75頁, 東京大学仏教青年会, 1971年10月)。【昭和47年度】③ The Codes of of Chōsokabe Motochika and the Economy of Buddhist Temples in His Day (III) (印度学仏教学研究21-1, 469~479頁, 日本印度学仏教学会, 1972年12月), ④ 「仏教学関係欧文雑誌内容目録(1971年8月~1972年1月)Ⅳ」(仏教文化3-2, 66~74頁, 東京大学仏教青年会, 1972年5月), ⑦ 「伊達藩の宗教政策」(日本宗教学会第31回学術大会, 1972年10月20日, 於駒沢大学)。

丹 喬二【昭和43年度】③ 「戸に関する一考察—主戸客戸制研究の前提—」(東洋史研究27-1, 38~64頁, 東洋史研究会, 1968年6月)。【昭和45年度】③ 「宋代の地主『奴僕』関係」(東洋学報53-3・4, 76~116頁, 1971年3月), 【昭和46年度】④ 「宋代の佃戸制をめぐる諸問題—草野説の検討を中心に—」(学叢12, 91~107頁, 日本大学文理学部, 1972年3月)。

竺沙雅章【昭和43年度】② 『桑原隲藏博士所蔵図書目録』(編『桑原隲藏全集』別冊岩波書店, 1968年12月, 195頁), ⑤ 「山本隆義著『中国政治制度の研究』」(東洋史研究27-4, 182~186頁, 1969年3月), ⑦ 「東洋文庫所蔵三朝本『魏書』について」(東洋文庫談話会, 1968年5月18日), 「漢籍の紙背文書について」(史学研究会例会, 1968年10月5日), ⑧ 「名臣列伝」(『世界歴史シリーズ13・中国文化の成熟』, 101~109頁, 世界文化社, 1969年3月)。【昭和45年度】③ 「北宋士大夫の徙居と買田—主に東坡尺牘を資料として—」(史林54-2, 28~53頁, 史学研究会, 1971年3月)。【昭和47年度】③ 「漢籍紙背文書の研究」(京都大学文学部紀要14, 1~54頁, 京都大学文学部, 1973年3月), ⑦ 「方臘の乱と喫菜事魔」(仏教史学会大会, 1972年12月9日)。

辻 直四郎【昭和44年度】⑤ 「サー・ハロルド・ベイレイ著『コートン語テキスト』」(東洋学報52-2, 118~120頁, 1969年)。【昭和45年度】① 「現存ヤジュル・ヴェーダ文献」(東洋文庫, 1970年, 225頁), ③ 「法華經の言語」(金倉圓照編『法華經の成立と展開』3~21頁, 平楽寺書店, 1970年), ⑥ 「リグ・ヴェーダ讃歌」(岩波書店, 1970年, 390+7頁)。【昭和46年度】③ 「シャーヴァ・アシュヴァ物語」(『金田一博士米寿記念論集』, 864~849頁, 三省堂, 1971年), ⑤ 「C. G. カーシーカル編『シュラウタ祭全書』第2巻, 梵文部第1部」(東洋学報54-4, 261~263頁, 1971年), 「M. S. ソーンダッケ・T. N. ダルマーディカーリ出版『タイッティリーヤ・サンヒター』」(東洋学報54-4, 259~260頁, 1971年), 「紙魚のはこ」(鈴木學術財団年報5-7, 105~119頁, 鈴木學術財団, 1971年, 同5-8, 115~121頁, 1971年, 同5-9, 135~141頁, 1972年)。【昭和47年度】① 「サンスクリット文学史」(岩波

全書, 1972年, XXI, 354頁), ③「マイトラーヤニー・サンヒター四・八・一 ヴェーダ散文研究への一提言」(『東方学会創立25周年記念東方学論集』, 864~856頁, 東方学会, 1972年), ⑤「カウシカ・スートラのダーリラ釈」(『東洋学報』55-2, 244, ~246頁, 1972年), 『ヴァーラーハ・クリヒア・スートラ』のフランス語訳註(『東洋学報』55-3, 1972年)。

鶴見尚弘【昭和43年度】③「清初, 蘇州府の魚鱗冊に関する一考察」(『社会経済史学』34-5, 1~31頁, 1969年1月), ⑦「国立国会図書館所蔵, 康熙十五年丈量の長洲県魚鱗冊に関する一考察」(『東洋文庫談話会』, 1969年3月), 【昭和45年度】③「明代における郷村支配」(『岩波講座・世界歴史』12, 57~92頁, 1971年2月)。

土肥義和【昭和43年度】⑦「唐の戸令及び田令に関する若干の考察—現存敦煌戸籍の整理を中心として—」(『東洋文庫談話会』, 1968年6月22日)。【昭和44年度】③「唐令よりみたる現存唐代戸籍の基礎的研究(上・下)」(『東洋学報』52-1・2, 90~126頁・213~264頁, 東洋学術協会, 1969年6月・9月)。【昭和45年度】⑧「唐令よりみたる現存唐代戸籍の一考察」(『史学会研究発表要旨』(『史学雑誌』79-1, 133~134頁, 1970年1月), 「敦煌写経の残存事情について」(『歴史と地理』1971-2, 24~25頁, 山川出版社, 1971年2月)。【昭和46年度】⑦「唐代敦煌の田土還受問題について—已受田の数量的分析を中心に—」(『史学会東洋史部会研究発表』, 1971年11月)(『研究発表要旨—史学会『第69回大会プログラム』, 『史学雑誌』80-12, 81~82頁, 1971年12月)。

鳥海 靖【昭和43年度】⑧「東京の百年」(池田弥三郎他編『日本の文化地理』6, 東京, 93~110頁, 講談社, 1968年8月)。【昭和44年度】①『祖父と父の日本』(『大世界史』23, 文芸春秋社, 1969年4月, 362頁), ⑧「昭和初期の『革新』運動と軍部」(『日本史のしおり』8, 1~10頁, 1970年2月)。【昭和45年度】『『反逆者』への寛容』(『ばれるが』229, 2~5頁, 評論社, 1971年3月)。【昭和46年度】③「原内閣崩壊後における『挙国一致内閣』路線の展開と挫折」(『東京大学教養学部人文科学科紀要』第54輯<歴史学研究報告第14集「歴史と文化」X>65~122頁, 1972年3月), 「対外危機における新聞論調—日露戦争と満州事変の場合—」(『日本文化会議編『東西文化比較研究第2回セミナー, 一日本におけるジャーナリズムの特質—』1~19頁, 1971年11月), 「現代史におけるファシズムとマス=デモクラシー」(『日本史のしおり』11, 1~17頁, 帝国書院, 1971年5月), ⑥「埼玉新聞社編『秩父事件』(一)」(『史学雑誌』80-9, 96~97頁, 1971年9月), 「坂根義久校注『青木周蔵自伝』」(『史学雑誌』80-10, 108~110頁, 1971年10月), ⑧「自伝文学の中の明治・大正」(『諸君』3-12, 192~199頁, 1971年12月)。【昭和47年度】②「伊藤博文関係文書」第一巻(伊藤隆他共編, 塙書房, 1973年1月, 493頁), 「小川平吉関係文書」1・2(岡

義武他共編、みすず書房、1973年3月、1-749頁、2-718頁)、⑤「尚友倶楽部『研究会史』(史学雑誌81-7、99~100頁、1972年7月)、「国立国会図書館『人物文献索引—法律政治編』(史学雑誌82-2、104頁、1973年3月)、「福島市史編集委員会編『福島市史10・近代資料I』(史学雑誌82-3、91頁、1973年3月)、⑧「山県有朋と日露戦争」ばれるが241、13~16頁、評論社、1972年4月)、「対外危機における日本の新聞論調—日露戦争と満州事変の場合—」(歴史と人物9、22~38頁、中央公論社、1972年5月)、「座談会・新聞が国を誤ませたとき」(石川達三・本間長世と) (諸君4-9、154~163頁、文芸春秋社、1972年9月)、「近代日本における『反逆者』への寛容」(歴史と人物19、28~41頁、中央公論社、1973年3月)。

仲田浩三【昭和43年度】③「元のジャワ進討」(東方学37、101~125頁、東方学会、1969年3月)、⑦「東南アジアの基層文化の性格」(東南アジア史学会研究会、1969年1月24日)、「戦後出土したインドネシアの刻文」(東南アジア史学会研究会、1969年3月14日)。
【昭和44年度】③「ジャワの羽衣説話について」(鹿児島大学史録2、41~50頁、鹿児島大学教養部史学教室、1969年12月)。
【昭和45年度】⑦「ジャワ文字の史的考察—特に古ジャワ文字の起源について—」(東南アジア史学会大会、1970年11月14日—要旨・東南アジア史学会会報14、6~7頁、1971年4月)。
【昭和46年度】④「古ジャワ語の辞典編纂について」(東南アジア史学会会報14、9~10頁、東南アジア史学会、1971年4月)、⑦「東南アジアのブラーフミー系文字について」(東南アジア史学会大会、1971年11月27日—要旨・東南アジア史学会会報16、5~6頁、1972年2月)、⑧「ジャワの銅板刻文の弁偽法」(東南アジア—歴史と文化1、154~155頁、東南アジア史学会、1971年10月)。
【昭和47年度】③「訶陵国考考」(東南アジア—歴史と文化2、100~121頁、東南アジア史学会、1972年10月)、「東南アジアの Brahmi 系文字の cerebral NA—扶南国の滅亡と訶陵国・Srivijaya 国の勃興の史的状況についての予備的考察—」(東方学45、102~122頁、東方学会、1973年1月)、⑤「ビヒオー著『ジャワの文字』(史学雑誌81-9、83~91頁、1972年9月)。

永田雄三【昭和44年度】③「マフムート2世の中央集権化政策の一端」(オリエントⅫ-3~4、149~168頁、オリエント学会、1969年11月)、「アーヤーン層の社会経済史的考察」(『後進国経済発展の史的研究』109~182頁、アジア経済研究所、1970年3月)、④「トルコにおけるオスマン朝史研究の近況」(オリエントⅫ-3~4、161~180頁、オリエント学会、1969年8月)。
【昭和45年度】③「トルコの近代化と文字」(歴史教育18-7、32~38頁、日本書院、1970年7月)、⑤「トゥウン著『スレイマン大帝の王子バヤズィドの反乱』(東洋学報53-1、94~103頁、1970年6月)、⑧「最近東洋文庫において蒐集されたオスマン朝史関係の文献及びマイクロ・フィルムI」(東洋学報53-2、01~010頁、1970年9月)、「同上(2)」(東洋学報53-3・4、01~012

頁, 1971年3月)。【昭和46年度】③「トルコ語史料よりみたる1770年におけるモレシア半島のギリシア人反乱」(史学雑誌80-7, 46~63頁, 1971年7月), 「タンジマート, 青年トルコ革命」(護雅夫編『トルコの社会と経済』, 1~60頁, アジア経済研究所, 1971年12月), 「17世紀初頭の東地中海貿易に関する一トルコ語史料」(史学44-1, 77~88頁, 三田史学会, 1971年10月), ⑧「イスラム講座—セルジューク朝・オスマン朝」(イスラム世界8, 39~51頁, 日本イスラム協会, 1971年10月)。【昭和47年度】④「西アジア史研究の現状(3) 1258年以降の西アジア」(歴史と地理, 12~30頁, 山川出版社, 1972年11月), 「回顧と展望—(西アジア・北アフリカ)」(史学雑誌81-5, 273~280頁, 1972年5月), ⑤「センジュル=ディヴィッチオウル著『アジアの生産様式とオスマン朝社会』」(東洋学報55-1, 111~118頁, 1972年6月), ⑦「トルコにおけるムスリム宗教運動に関する一考察」(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告Ⅱ』所収, 1972年5月)。

中嶋 敏【昭和46年度】⑦「慶元条法事類について」(東洋文庫東洋学講座, 1971年6月9日)。

坂野正高【昭和43年度】⑧「大世界史よもやま話」(衛藤瀧吉著『大世界史』20, 付録1~3頁, 文芸春秋社, 1969年1月)。【昭和44年度】⑤「衛藤瀧吉著『近代中国政治史研究』」(アジア研究16-3, 112~114頁, アジア政経学会, 1969年10月), ⑧「百瀬弘訳註『西学東漸記—容闳自伝』解説」(同書, 267~285頁, 平凡社, 「東洋文庫」136, 1969年4月)。【昭和45年度】①『近代中国外交史研究』(岩波書店, 1970年7月, 453頁), ③「現代の学者における学問と政治—メリー・ライト教授小伝—」(東洋学報53-1, 104~128頁, 1970年6月), ⑤「ローレンス・オリファント著『エルギン伯中国日本派遣使節記』(復刻本)」(学鑑67-6, 78~79頁, 丸善, 1970年6月), ⑦「馬建忠(1844~1900)—李鴻章幕下の外交家, 行政家, 改革思想家—1878年の常駐外交使節論を中心として」(国際法学会秋季大会, 1970年10月18日), 「馬建忠(1844~1900)の外交官制度論」(史学会第68回大会, 東洋史部会, 1970年11月8日), 「Ma Chieng-chung (1844~1900) in Paris: two treatises (in 1878), on diplomacy and diplomatic service」(第28回国際東洋学者会議 於キャンベラ, 1971年1月), ⑧「水滸伝と資治通鑑」(アジア調査月報2-10, 32-33頁, 1970年10月)。【昭和46年度】①『現代外交の分析—情報・政策決定・外交交渉』(東京大学出版会, 1971年7月, 431頁), ③「フランス留学時代の馬建忠—外交および外交官制度についての二つの意見書(1878年)を中心として」(国家学会雑誌, 84-5・6合併号, 257~293頁, 国家学会, 1971年8月), ④「学会展望—1969年—(アジア)」(日本政治学会編『年報政治学1970』, 231~232頁, 岩波書店, 1971年), 「国際東洋学者会

議に出席して」(アジア調査月報, 1971年4月号, 33~45頁, アジア調査会), 「第28回国際東洋学会会議(1)―東洋史部門, ことに中国史関係の報告について」(史学雑誌 80-6, 986~992頁, 1971年6月), ⑤「市古宙三著『近代中国の政治と社会』」(週刊東洋経済3648, 112~113頁, 東洋経済新報社, 1972年2月)。【昭和47年度】③「馬建忠の海軍論―1882年の意見書を中心として」(川野重任編『アジアの近代化』, 313~344頁, 東京大学出版会, 1972年8月), “Ma Chien-chung 馬建忠 (1844~1900), a frustrated French-trained early reformist: his views on diplomatic service and naval training” (Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko No. 30, pp. 55~63, 1972), ⑧「アメリカ雑感―東部での一カ月」(アジア調査月報, 1972年9月号, 20~31頁), “A kaleidoscope of images: United States, Japan and China as personally experienced” (Bulletin of the International House of Japan 30, pp. 19~31, Oct. 1972)―和訳「私の経験した米国・日本・中国の五十年, イメジの万華鏡」(中央公論, 1972年8月号, 280~291頁), 「アメリカ雑記そのⅠ・イエールにおける論文指導」(UP. 1. 21~25頁, 東京大学出版会, 1972年11月), 「アメリカ雑記そのⅡ・『図書館専門職』ということ」(UP. 2, 12~16頁, 1972年12月), 「アメリカ雑記そのⅢ・『ニューヨーク・タイムズ』をよむ」(UP. 3, 18~22頁, 1973年1月), 「ある史料との再会」(アジア調査月報 33, 44~45頁, 1973年2月)。

藤枝 晃【昭和43年度】③「北朝における『勝鬘經』の伝承」(東方学報40, 325~349頁, 1969年3月), ⑤「鹿島研究会刊『京都百仏』」(京都新聞, 1968年12月) ⑧「デンマーク国立博物館の一日」(IDE 79, 21~28頁, 1968年4月1日), 「屑と宝」(図書230, 28~31頁, 1968年10月1日), 「町人学者・石浜純太郎」(図書234, 30~33頁, 1969年2月)。【昭和44年度】②『園田湖城遺作展図録』(滋賀県立琵琶湖文化館, 1969年6月, 48頁), ③「中国古銅印」・「法帖と拓本」解説(『寧楽譜』99~100頁, 寧楽美術館, 1969年4月), 「園田湖城」(墨美194, 1~44頁, 1969年10月), 「印人・園田湖城」(図書244, 36~39頁, 1969年12月), “The Tunhuang Manuscripts. A General Description Part II” (Zinbun 10, pp. 17~39, Dec. 1969), 「楼蘭文書札記」(東方学報41, 197~215頁, 1970年3月), ④「『勝鬘經』とその注釈書」(『仏教の思想』月報7, 6~8頁, 角川書店, 1969年5月), ⑧「ラグビーの革命児・村山仁」(京都新聞「忘れ得ぬ人」, 1969年5月), 「美術館探訪―寧楽美術館」(古美術26, 133~134頁, 1969年6月), 「矢野仁一先生と『昭和6年』」(東洋史研究28-4「矢野仁一博士追悼録」, 30~32頁, 1970年3月)。【昭和45年度】②『平盒穿帯印百選』2(京都・同風印社, 100+Ⅶ頁, 1970年8月), ⑦“Heutige Zustand der sinologische Forschungen in Japan” (DDR 科学アカデミー古代史考古学中央研究所, 1970年9月15日), ⑧「筆書きの運命」(読売新聞, 1970年4月7日), 「ゴア

副王書簡」(京都新聞「門外不出」, 1970年7月11日)。【昭和46年度】①『文字の文化史』(岩波書店, 1971年10月, XI+280頁), ③「于闐の鼠」(日本美術工芸400, 26~33年1月), 「敦煌写本の編年研究」(学術月報24-12, 709~713頁, 1972年3月), ⑦頁, 1972 “Buddist Caves at Tunhuang after 900 A.D.”(II Colloquies of Percival David Foundation of Chinese Art. London Univ. Ith Jul. 1971), ⑧「ペイリー教授の来講」(人文3, 14~15頁, 1971年8月), 「コペンハーゲンの学生たち」(以文14, 19~22頁, 1971年10月), 「神話の尾」(図書268, 1頁, 1971年12月)「書道・このふしぎな芸術」(朝日新聞, 1972年1月22日)。【昭和47年度】⑤「梅原郁・衣川強編『遼金元人伝記索引』」(人文6, 20頁, 1973年1月), ⑥「ティロ『東独科神』」(図ミの古代東洋研究の現状」(朝日新聞, 1973年1月), ⑧「私の“日本精学アカデ書274, 40~44頁, 1972年6月), 「百五十年前と百年前」(図書283, 38~41頁, 1973年3月), 「京の西陣」(月刊高層住宅70, 巻末折込, 1973年3月)。

本庄比佐子【昭和46年度】②『王明選集』2, (汲古書院9, 1971年11月, 476頁), ③「福建事変と中国共産党」(近代中国研究センター彙報15, 1~13頁, 東洋文庫近代中国研究センター, 1971年10月), ⑤「シャンティ・スワラップ著『中国共産主義運動の研究』」(東洋学報54-2, 114~119頁, 東洋学術協会, 1971年9月)。【昭和47年度】⑥「ヴェ・イ・グルーニン, ア・エム・グリゴリエフ共著『毛沢東主義者の歴史学における中国共産党史の偽造』」(お茶の水史学15, 84~97頁, お茶の水女子大学史学科読史会, 1973年3月)。

松村 潤【昭和43年度】①『紫禁城の栄光』(共著「大世界史」11, 文芸春秋社, 1968年4月), ⑤「黄彰健氏の清太祖に関する論考五編」(東洋学報51-1, 105~112頁, 1968年)。【和昭44年度】②『東北地域』(『日本における歴史学の発達と現状Ⅲ』, 385~400頁, 東大出版会, 1969年9月), ③「崇徳の改元と大清の国号について」(『鎌田先生還暦記念歴史学論叢』274~287頁, 同上刊行会, 1969年9月), ⑤「陸戦史研究普及会編『明と清の決戦—サルフの戦』」(歴史教育17-8, 106~107頁, 1969年8月), ⑦“The Early Manchu Tablets”(第3回東亞アルタイ学会議, 1969年8月20日, Proceeding of the 3rd East Asiatic Altaic Conference, 182~193頁)。

【昭和45年度】③「漠北の経略」(『日本と世界の歴史』12, 240~243頁, 学習研究社, 1970年7月), 「満州の風雲」(『日本と世界の歴史』14, 236~241頁, 学習研究社, 1970年10月), ⑤「護雅夫『古代トルコ民族史研究Ⅰ』」(歴史と地理1970-5, 43~45頁, 山川出版社, 1970年5月)。【昭和46年度】①『鑲紅旗檔—雍正期』(東洋文庫, 1972年3月, 119頁), 『旧満洲檔—天聰9年Ⅰ』(東洋文庫, 1972年3月, 161頁, ③「崇徳元年の満文木牌について」(日本大学人文科学研究所紀要13, 125~140頁, 図版13頁, 日本大学文理学部人文科学研究所, 1971年5月), 「満洲始祖伝説研究」

(故宮文獻季刊3-1, 51~57頁, 國立故宮博物院, 1971年12月), ⑦「清朝の開国説話について」(東洋文庫談話会, 1971年6月19日)。【昭和47年度】③「清太宗の後妃」(國立政治大學辺政研究所年報3, 台北, 國立政治大學辺政研究所, 55~76頁, 1972年7月), 「清朝の開国説話について」(『山本博士還暦記念東洋史論叢』, 431~442頁, 山川出版社, 1972年12月), 「順治初纂清太宗実録について」(『創立七十周年記念論文集』65~78頁, 日本大学文理学部人文科学研究所, 1973年3月), ④「1971年の歴史学界—回顧と展望—中央アジア」(史学雑誌81-5, 244~247頁, 1972年5月)。

松本信広【昭和44年度】①『ベトナム民族小史』(『岩波新書』, 1969年5月)。【昭和46年度】②『論集日本文化の起源3, 民族学1』(平凡社, 1971年11月), ③“Japan und China im Lichte einiger japanischer Tier und Pflanzen namen”(『W. シュミット生誕100年記念論文集』, 49~83頁, 中日新聞社, 1971年11月), ⑤“Roger Duff ‘Stone Adzes of Southeast Asia: An Illustrated Typology.’”(東南アジア歴史と文化1, 144~146頁, 東南アジア史学会, 1971年10月)。【昭和47年度】④「アンコール・ワットの発見者」(東南アジア歴史と文化2, 202~203頁, 1972年10月)。

村松裕次【昭和43年度】③「清代の義倉」(一橋大学研究年報・人文科学研究11, 77~200頁, 1969年3月), ⑤“Suzuki Chūsei: ‘Chibetto o meguru Chū-In kankei: Jūhachi seiki nakagoro kara jūkyū seiki nakagoro made pp. 399+22, Tokyo. 1962’”(RBS・8 pp. 145~146, Paris. 1968), “Chien Yu-wen ‘Tai-ping tien-kuo Chuan-shih’ pp. 2318+18+66, 3 vols. Kowloon 1962’”(RBS・8 pp. 149~150, Paris, 1968), “‘Li Hsiu-cheng chin-kung shou-chi’, Taipei 1962’”(RBS・8 p. 150, Paris 1868), ⑤“‘Imanaga Seiji: ‘Nakada Yoshinobu <Dōji nenkan no Sen-Kan no kai-ran ni tsuite>’ o megutte’ Shigaku Kenkyū 85, pp. 45~56, 1962’”(RBS・8 pp. 153~154, Paris 1968), ⑧「続・私の中国観」(黎明叢書35, 36頁, 東京1968年)。【昭和44年度】③「乾隆時代下級満洲貴族の地産と人丁—『大爺得分屯中差租地畝享田屯中北寨関東軍処人丁地畝總冊』という史料について」(東洋史研究28-4, 75~98頁, 京都, 1970年3月), ⑤「エチアヌ・バラッシュ『中国の恒久的官僚制社会』」(みすず127, 10~23頁, みすず書房, 1970年2月)。【昭和45年度】①『近代江南の租棧—中国地主制度の研究』(東大出版会, 1970年8月初刷, 1972年9月2刷, 813頁), ⑤“Lin Tse-hsü chi: ‘Kung-tu’” pp. 2+10+195, Peking 1963 (RBS・9 pp. 153~154, Paris, 1971), “Shen Yüan: ‘Hung Hsiu-chuan ho T’ai-ping tien kuo ko-ming’ LSYC 1963-1, pp. 49~94”, (RBS・9 pp. 158~159, Paris, 1971), “Chí Pen-Yü: ‘Ping Li Hsiu-chéng tsu-shu: Ping túng Lo Erh-

Kang, hiang Hu-lu, Lü Chi-i teng hsien-sheng shang-ch'üeh LSYC 1963-4, pp. 27~42." (RBS・9, pp. 158~159, Paris 1971), "Lo Erh-kang: 'Kuang yü wo hsieh hi Hsiu-ch'eng tsu-shu káo-cheng ti chi-tien shuo-ming' LSYC 1963-4, pp. 44~45" (RBS・9 pp. 160~161, Paris 1971), "Sasaki Masaya: 'Kampō ninen Ginken no kōryō bōdō' Kindai Chūgoku Kenkyū 5, pp. 185~299, 1963" (RBS・9, pp. 163~164, Paris, 1971)。【昭和46年度】③ "Banner estates and banner lands in 18th century China-evidence from two new sources" (Hitotsubashi Journal of Economics, Vol. 12-2, pp. 1~13, Tokyo, Feb. 1972), 「撫地の取租冊檔および差銀冊檔について(改訂稿)」(一橋大学研究年報, 経済学研究16, 1~92頁, 1972年3月), ⑥ 「エチアヌ・バラージュ『中国文明と官僚制』」みすず書房1971年5月第1刷, 1972年5月第2刷, 197+17頁)。【昭和47年度】③ 「近代江南の租棧」(学術月報25-4, 14~17頁, 日本學術振興会, 1972年7月), 「撫地問題憶説—満洲的土地制度の原型」(川野重任編『アジアの近代化』293~311頁, 東大出版会, 1972年9月), 「中国の地主制と日本の地主制—『近代江南の租棧』をめぐる」(三田評論, 1972年11月, 4~23頁, 慶応大学), 「中国の村と革命」(アジア研究20-3, アジア政経学会, 1973年3月), ⑤ "Taiping Rebellion: History and Documents." (By fany Michael Vol. II, III, Documents and Cmments, Seattle: University of Washington Press 1971, JAB. XXXI-4, pp. 929~930, Aug. 1972), ⑧ 「ワシントン大学刊大平天国史料集二冊について」(一橋論叢 67-6, 104~107頁, 1972年6月), 「続々私の中国観」(黎明叢書, 23頁, 1973年2月)。

護 雅夫【昭和43年度】⑤ 「松本清張『古代史疑』」(東京大学新聞, 1968年5月), 「詳説オスマン朝史」(東洋学報51-3, 1968年12月), ⑦ 「騎馬民族—北方諸民族の興亡—」(NHK 学校放送, 1968年6月), 「イスラーム帝国としてのオスマン朝国家」(アジア・アフリカ言語文化研究所「イスラム化研究会」, 1968年10月), ⑧ 「内陸の王者チムール」(『世界の歴史』6, 集英社, 1968年10月), 「イスタンブールの栄華」(『イスラム世界』世界文化社, 1968年11月), 「オスマン・トルコ」(『世界の歴史』8, 集英社, 1968年12月)。【昭和44年度】③ 「bōgū (bügü) ga'yan と匈奴」(『鎌田博士還暦記念歴史学論叢』, 1969年4月), 「Tonyuquq 碑文に見える bōgū-, bügü-ga'yan について」(東洋学報52-1, 1969年6月), 「オスマン朝の性格」(歴史と地理, 山川出版社, 1969年5月), 「漢代における文化交流の一例」(東洋学術研究8-3, 1969年10月), 「西アジア世界 総説」(『岩波講座・世界歴史』8, 1969年10月), ⑥ 「S. ランシマン『コンスタンティノーブル陥落す』」(みすず書房, 1969年11月), ⑦ 「トルコのイスラム教の特質」(アジア経済研究所, 1969年9月), ⑧ 「草原とオアシスの遺宝」(東京新聞, 1969年5月), 「アラブの一湖水—8~11世紀の地中海世界—」(高校教育, 1969年11月), 「民族と文化のつぼ」(『西アジ

アとイスラムの国』小学館, 1969年6月), 「遊牧民族について」(学燈66-7, 1969年7月), 「イスラム教とトルコ民族」(東京新聞, 1969年7月), 「『三国志』の主役たち」(同上), 「ジンギスカンと元」(同上, 1969年8月), 「チムール帝国」(同上, 1969年11月), 「北方騎馬民族の動き—柔然・鮮卑の興亡—」(『日本と世界の歴史』3, 学習研究社, 1969年12月)。【昭和45年度】②『漢とローマ』(平凡社, 1970年9月), ③「内陸アジア世界の展開Ⅰ 総説」(『岩波講座・世界歴史』9, 1970年2月), 「トルコ革命」(同上25, 1970年8月), 「オスマン帝国の遺産」(『イスラム帝国の遺産』平凡社, 1970年12月), ⑤「A. N. コノノフ教授満60歳記念チュルク学論文集」(東洋学報53-2, 1970年9月), ⑦「トルコの改革—ケマルニエアタチュルク—」(NHK 学校放送, 1970年2月), 「イスラム教の発展」(仏教文化研究会, 1970年2月), 「中央アジアの叙事詩」(NHK 学校放送, 1970年8月), 「突厥帝国の成立—トルコ民族の北アジア制覇—」(『日本と世界の歴史』4, 1970年1月), 「長安を中心とする東西文化の交流」(東洋学術研究8-4, 1970年2月), 「白鳥先生と『言語学』」(『白鳥庫吉全集』5, 月報, 1970年5月)。【昭和46年度】②『トルコの社会と経済』(アジア経済研究所, 1971年12月), ③「北アジア・古代遊牧国家の構造」(『岩波講座・世界歴史』6, 1971年1月), 「ブリツァク『24大臣—匈奴国家の統治機構史の研究—』について」(史学雑誌80-1, 1971年1月), 「オスマン帝国の改革運動」(『岩波講座・世界歴史』21, 1971年8月), 「西アジアにおける歴史意識」(同上30, 1971年11月), ⑥『騎馬民族史—正史北狄伝—(1)』(共訳, 平凡社, 1971年12月), ⑦「内陸アジアにおける言語と文化」(内陸アジア史学会, 1971年11月, 「A New Materials on the Sogdians in the Nomadic State」(第四回東アジア・アルタイ学会, 1971年12月), ⑧「チムール帝国の世界史的役割」(歴史と人物, 1971年4月)。【昭和47年度】③「Siçi ve Ssü-chih」(Tarih Araştırmaları Dergisi, 6, Ankara, 1972), 「突厥帝国内部におけるソグド人の役割に関する新資料」(史学雑誌81-2, 1972年2月), 「ソグド人の東方発展に関する考古学的資料」(遊牧社会史探求45, 1972年3月), 「阿史德元珍と Tonyuquq」(『山本博士還暦記念東洋史論叢』, 1972年10月), ⑤「V. S. タスキン訳注『匈奴史関係史料』」(東洋学報55-1, 1972年6月), ⑥『騎馬民族史—正史北狄伝—(2)』(共訳, 平凡社, 1972年12月), 「A. D. グラーチ『古代チュルク時代の編年のおよび種族・文化的範囲』」(ユーラシア, 7, 1972年12月), 「L. R. クィズラソフ『古代チュルク語碑文に見える「バルバル(balbal)」なる術語の意義について』」(同上), ⑦「Türgișとソグド人居留地」(オリエント学会, 1972年9月), ⑧「モンゴル軍ヴェトナムに敗る」(歴史と人物, 1972年4月), 「いわゆる『騎馬民族説』について」(同上, 1972年6月), 「ヘロドトス・メナンドロス・元朝秘史」(モンゴル学会会報3, 1972年6月), 「李陵」(歴史と人物, 1973年1月), 「李陵出軍す」(同上, 1973年2月), 「李陵と司馬

遷」(同上, 1973年3月)。

森岡 康【昭和44年度】③『『大君陣』一仁祖朝における官家の私有地・私有権について』(朝鮮学報第49輯, 407~425頁, 朝鮮学会, 1968年10月)。

山口瑞鳳【昭和43年度】③「吐蕃—伝承と制度から見た性格」(歴史教育15・9・10, 41~48頁, 1968年10月)。【昭和44年度】③「白蘭と Sum pa の rlañs 氏」(東洋学報52-1, 1~61頁, 1969年6月), “Matrimonial Relationship between the T'u-fan and the T'ang dynasties, Part I”(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 27, pp. 141~166, Toyo Bunko, 1969)。【昭和45年度】②“Catalogue of the Toyo Bunko, Collection of Tibetan Works on History”(東洋文庫, 1970年4月, 249頁), ③“Su-p'i and Sun-po”(Acta Asiatica 19, pp. 97~133 東方学会, 1970年11月), ⑤「E. G. スミス著『パンチェン・ラマー世自伝解説その他』」(東洋学報53-3・4, 176~187頁, 1971年3月)。【昭和46年度】“Matrimonial Relationship between the T'u-fan and the T'ang dynasties, Part II”(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko, No. 28, pp. 59~100, Toyo Bunko, 1971), 「東女国と白蘭」(東洋学報54-3, 1~56頁, 1971年12月), 「吐蕃の国号」(日本西藏学会会報18, 日本西藏学会, 1972年3月), ⑤「A. マクドナルド『ペリオチベットの文書の読解』」(東洋学報54-4, 78~87頁, 1972年3月), ⑥「R. A. スタン『チベットの文化』」(定方晟共訳, 岩波書店, 1971年11月)。【昭和47年度】③「女国の部族名 dMu」(日本西藏学会報19, 2~6頁, 1973年3月)。

山崎元一【昭和43年度】③「古代インドの雇傭労働者」(東洋学報51-4, 39~79頁, 1969年3月), ④「1967年の歴史学界—回顧と展望—(インド)」(史学雑誌77-5, 273~277頁, 1968年5月), 「インド考古学会第一回大会」(史学雑誌77-7, 84~88頁, 1968年7月)。【昭和44年度】③「インド古代奴隷制の性格」(松井透・山崎利男編『インド史における土地制度と権力構造』, 3~36頁, 東京大学出版会, 1969年10月), 「マウリヤ古代統一帝国」(『岩波講座・世界歴史』3, 249~294頁, 1970年1月), ④「1968年の歴史学界—回顧と展望—(インド)」(史学雑誌78-5, 247~252頁, 1969年5月)。【昭和45年度】③「仏典に記述された古代インドの村落」(東洋文化50・51合併, 1~20頁, 東京大学東洋文化研究所, 1971年3月)(松井透編『インド土地制度史研究』1~20頁, 東京大学出版会, 1972年1月), 「古代インドの賤民制度—不可触賤民チャンダーラを中心として」(東洋学報53-3・4合併, 1~45頁, 東洋学術協会, 1971年3月), ⑤「J. P. シャルマ著『古代インドの諸共和国』」(東洋学報52-3, 107~114頁, 東洋学術協会, 1970年12月), ⑥「ロミラ・ターパル著『インド史(1)』」(共訳, みすず書房, 1970年9月, 168+30頁)。【昭和46年度】③「于闐建国伝説成立の背景」(国学院雑誌73-3, 6~16頁, 国学院大学, 1972年3月),

④「1970年の歴史学界一回顧と展望—(インド)」(史学雑誌80-5, 256~259頁, 1971年5月), ⑤「トラウトマン著『カウティリヤと“アルタシャーストラ”』—作者とテキスト発達に関する統計学的研究—」(東方学報54-4, 1972年3月), ⑥「ロミラ・ターバル著『インド史(2)』」(共訳, みすず書房, 1972年3月)。【昭和47年度】③「于闐建国伝説の一考察—特にアショーカ王伝説との関係について」(『山本博士還暦記念東洋史論叢』, 469~480頁, 山川出版会, 1972年10月), 「インド古代史と貨幣」(国学院雑誌74-3, 22~33頁, 国学院大学, 1973年3月)。

山根幸夫【昭和43年度】③「日本人の中国観—内藤湖南と吉野作造の場合—」(東京女子大学論集19-1, 1~14頁, 東京女子大学学会, 1968年9月), 「五四運動と蔡元培」(『東京女子大学創立五十周年記念論文集・社会科学編』145~181頁, 東京女子大学学会, 1968年10月), ⑤「近代中国をめぐる国際関係—批評と紹介」(東京女子大学論集19-1, 109~112頁, 東京女子大学学会, 1968年9月), 「窪徳忠・西順蔵編『中国文化叢書6・宗教』」(漢文教室87, 23頁, 大修館書店, 1968年7月)。【昭和44年度】③「台湾糖業政策と新渡戸稲造」(『新渡戸稲造研究』259~301頁, 春秋社, 1969年10月), 「日本の植民地支配の一側面—台湾協会より東洋協会へ—」(はらから10, 2~12頁, はらから編集部, 1969年9月), ⑤「中田吉信編『日本主要図書館・研究所所蔵中国地方志総合目録』」(東洋学報52-1, 126~128頁, 1969年9月)。【昭和45年度】②『日本現存元人文集目録』(小川尚共編, 汲古書院, 1970年4月, 66頁), 『増補日本現存明代地方志目録』(細野浩二共編, 東洋文庫明代史研究室, 1971年3月, 45頁), ③「〈元末の反乱〉と明朝支配の確立」(『岩波講座・世界歴史』12, 17~56頁, 1971年2月), 「15世紀のアジア」(『日本と世界の歴史』12, 217~223頁, 学習研究社, 1970年7月), 「激動する明末社会」(『日本と世界の歴史』13, 270~275頁, 学習研究社, 1970年9月), ⑤「丸山松幸・斎藤道彦編『李大釗文献目録付選集未収資料』」(東洋学報53-2, 103~105頁, 1970年9月), ⑥座談会「庶民の登場」(笠原一男, 堀越孝一, 『日本と世界の歴史』12, 8~16頁, 学習研究社, 1970年7月)。【昭和46年度】②『元代史研究文献目録』(大嶋立子共編, 汲古書院, 1971年8月, 220頁), 『光明日報中国関係論文目録』(東京女子大学東洋史研究室, 1971年11月, 136頁), ⑤「栗林宣夫著『里甲制の研究』」(東洋学報54-2, 109~114頁, 1971年9月), 「加藤豊隆著『満州国警察小史—満州国権力の実態について』」(東洋学報54-4, 76~78頁, 1972年3月), 「朝鮮近代史に関する諸研究—批評と紹介」(東京女子大学論集22-1・2, 72~75頁, 東京女子大学学会, 1972年3月), ⑧「義和団研究文献目録」(史論23, 28~39頁, 東京女子大学読史会, 1971年10月), 【昭和47年度】②『辛亥革命文献目録』(東京女子大学東洋史研究室, 1972年10月, 105頁), 『福恵全書付解題・索引』(汲古書院, 1973年2月, 466頁), ③「女子大生は日中戦争をこう考える」(歴史評論269, 104~117頁, 歴史科学協議会, 1972年11

月), ⑤『『中央研究院近代史研究所集刊』』(東洋学報55-1, 102~104頁, 1972年6月), 「中華民国史料研究中心編『中国現代史專題研究報告』」(東洋学報55-2, 98~101頁, 1972年9月), 「丹羽友三郎『元朝における院・寺・監等の設立過程について』『元代の地方行政系統に関する一研究』」(法制史研究22, 212~213頁, 法制史学会, 1973年3月), ③「東アジア史への私の歩み」(歴史評論270, 80~82頁, 歴史科学協議会, 1972年12月)。

渡辺紘良【昭和45年度】⑦「宋代奴僕労働の形成一特に収養について一」(東洋文庫談話会, 1970年11月14日)。【昭和46年度】④「1970年の歴史学会一回顧と展望—五代・宋・元」(史学雑誌80-5, 204~211頁, 1971年5月)。

【追記】

榎一雄【昭和43年度】⑧「魏志東夷伝」(NHKラジオ放送, 教師生徒共同, 高等学校1学期, 4月8日~7月20日, 27頁)。【昭和46年度】③「邪馬台国の方位について(再録)」(『論集日本文化の起源』(2)日本史, 平凡社刊, 130~138頁), 「西欧文明と東アジア(東西文明の交流)5」(監修及びはしがき, 序章 報筆, 平凡社)。

村松祐次【45年度】⑤“Sasaki Masaya ‘Kampō sannen Amoy Shōtōkai no hanran’ Toyo Gakuho 45, pp. 520~545, 1963” (RBS. 9, pp. 164~166, Paris, 1971)。

III 東洋文庫附置

ユネスコ東アジア文化研究センター事業

1. 調査研究

A. 「東アジア諸国における人権思想の発達」

【期間】42年度より45年度まで。【専門委員】辻直四郎（委員長）、石田 雄、板野長八、衛藤藩吉、丸山真男、山本達郎。

【事業内容】調査研究の内容を、(a) 19～20 世紀における「人権」に関する新しい概念の導入とその展開の分析、(b) 「人権」に関する伝統的な概念と、それと新しい概念との関連の分析、に焦点をあわせた。各専門委員が各々の専門領域の研究をすすめ、その成果を専門委員会で発表した。それらの発表は、所内資料として、以下のように刊行した。

石田 雄「日本における権利の概念について」（43年3月17日発表）

板野長八「孔子、墨子、荘子の思想における人権の問題」（43年5月11日発表）

衛藤藩吉「アジア政治体制試論」（43年6月28日発表）

山本達郎「ヴェトナムにおける『人格』の問題—Phan Thi Dac, *Situation de la personne au Vietnam*, 1966 の紹介を中心として—」（43年9月20日発表）

石田 雄「田中耕太郎最高裁長官の観念構造における人権の位置」（43年11月6日発表）

また、国外専門家の報告として、タイより次の研究報告が寄せられた。

Prachoom Chomchai : “Development of Human Rights in Thailand—a Historical Sketch”

この報告は、機関紙 *East Asian Cultural Studies*, Vol. XII, Nos. 1-4, 1973 に掲載した。

本計画は、46年3月31日の最終専門委員会での総括討論をもって終了した。

B. 「日本の近代化に対する海外留学生およびお雇い外国人の貢献」

【期間】42年度より45年度まで。【専門委員】大久保利謙（委員長）、今井庄次、梅溪昇、緒方富雄、田中時彦、矢島祐利。

【事業内容】調査研究は、明治初年から20年までの来日外国人の調査に重点をおき、

総理府文書、外務省記録、東京大学文書の関連ある部分を写真複製して網羅的に調査し、約3,000名の来日外国人に関する記載をカードに採録、整理した。また、本テーマに関連する北海道庁文書をマイクロフィルム撮影し、函館図書館所蔵文書をゼロックス複写し、関連図書を集めた。

さらに、フランス人お雇い技師オジェの手紙を購入した。この手紙に関して次の研究報告を所内資料として刊行した。

矢島祐利「コワネ文書について—鉾山技師コワネとオジェの新資料」

また、専門委員会で次の二氏が研究発表をおこなった。

高橋邦太郎「西洋軍事技術の日本への導入に対するフランス人陸海軍軍人の役割」
(44年2月17日発表)

村松貞次郎「建築関係のお雇い外国人技師の果たした役割」(45年12月21日発表)

なお、後者の発表を、所内資料として刊行した。

ユネスコへの報告書として、次のものを提出した。

梅溪 昇 “Foreign Nationals Employed in Japan during the Years of Modernization”

この報告を、機関紙 *East Asian Cultural Studies*, Vol. X, Nos. 1-4, 1971 に掲載した。

本計画は46年3月30日の最終専門委員会の総括討論をもって終了した。ただし、本計画の成果を、

「資料よりみたるお雇い外国人 (仮題)」(小学館より出版予定)

として公刊するために、その編集を46,47年度にひきつづきおこなった。

C. 「近代日本における翻訳活動に関する調査」

【期間】42年度より43年度まで。【専門委員】辻直四郎(委員長)、下村富士男、前田陽一。

【事業内容】本計画は、明治初年より23年まで、西洋諸語から日本語に翻訳されたすべての文献をリスト・アップし、その所蔵場所を可能なかぎり確認することを目的とした。東京大学文学部の出版した「翻訳文献目録第一次未定稿、1868~1889」(1968年刊)にある翻訳文献約7,000点を、他の目録類と照合して増補訂正し、東京大学図書館、早稲田大学図書館、慶応大学図書館、国立国会図書館の所蔵本を調査して、約1,200点を増補した。また、東京大学明治新聞雑誌文庫、慶応大学図書館、早稲田大学図書館で、新聞、雑誌に掲載された翻訳文を調査し、約2,000点を確認した。さらに、内閣文庫と早稲田大学大隈文書を調査し、未刊の翻訳文約400点を確認した。

本計画の調査は43年度で一応終了したが、調査結果の確認と整理を44,45年度にひきつづきおこなった。

D. 「東アジア諸国の近代化の過程における伝統文化の変容とその新発展」

I 予備調査

【期間】44年度。【事業内容】本計画遂行のために必要な情報収集のため、内外の学者との連絡、図書の収集をおこなった。また、後藤 晃氏を、香港、ベトナム、ラオス、カンボジア、シンガポールに派遣し、各国の専門機関および専門家との連絡をとった。

II 第一期本調査「家族と宗教」

【期間】45年度から47年度まで。【専門委員】中根千枝（委員長）、青木 保、末成道男、杉山晃一、堀 一郎。

【事業内容】本調査研究は、東アジア諸国における(a)家族構造、(b)宗教思想、(c)文芸動向を分析し、研究することを目的とし、その第一期として(a)と(b)を合せて分析・調査することとした。まず、関連文献の目録作成をおこない、中根千枝氏はマレーシアに関する文献の目録を、青木 保氏は東南アジア全域に関する雑誌論文の目録を作成した。また、韓国の専門家から、韓国に関する文献の目録が寄せられた。この目録は次のように所内資料として刊行した。

柳東植編「文献目録・韓国における家族と宗教」

東アジアからの専門家を招いて国際シンポジウムを二回開催した。第一回は、韓国と日本の家族と宗教に関する比較研究がその目的で、第二回は、東南アジア諸国と日本との比較研究がその目的であった。

〔第1回 国際シンポジウム〕

【日時】46年6月18日より同20日まで。【場所】東洋文庫。【参加者】柳東植、李光奎、徐景洙、玄容駿（以上韓国）、青木 保、末成道男、杉山晃一、中根千枝、堀 一郎、村上重良、森岡清美、柳川啓一、吉田禎吾（以上日本）。【議事録】*East Asian Cultural Studies*, Vol. XI, Nos. 1-4, 1972（特集号）。

〔第2回 国際シンポジウム〕

【日時】47年9月3日より同6日まで。【場所】MRA アジア・センター（小田原）。【参加者】Nguyen Khac-Kham（ベトナム）、Koentjaraningrat（インドネシア）、Mohzani bin Abdul Rahim（マレーシア）、Ronald Morse（アメリカ）、Wang Sung-hsing（台湾）、Prasert Yamklinfung（タイ）、安齊 伸、石井米雄、伊藤幹治、大林太良、杉山晃一、中根千枝、堀 一郎、宗像 厳、森岡清美、山本達郎、柳川啓一、吉田禎吾（以上日本）。【議事録】*East Asian Cultural Studies*, Vol. XIII, Nos. 1-4, 1974（特集号）（予定）。

また、以下の各氏に海外実地調査を委嘱した。

中根千枝、シンガポール、マレーシア、タイ（47年1月）。

青木 保, タイ (47年4月より49年まで)。

杉山晃一, タイ (48年3月より49年まで)。

末成道男, 韓国 (46年3月より同4月)。

47年6月にインド人学者 T. N. Madan 氏を招いて、インドにおける家族と宗教に関する研究報告を受けた。

本計画の第一期本調査は48年3月で終了した。

E. 「仏教美術に関する研究」

【期間】45年度より47年度まで。【専門委員】高田 修 (委員長), 秋山光和, 伊藤延男, 塚本善隆, 長広敏雄, 西川新次, 柳沢 孝。

【事業内容】本計画は、44年度にすでに準備を始め、同年度中に、専門家会議を数回開催して、その意見をもとにユネスコへの示唆と提案をおこない、44年11月のコロンボでの国際専門家会議に出席した秋山光和氏の報告書作成に協力した。

45年度から本調査に着手し、調査研究の具体的なテーマを「大乘仏教美術の起源とその展開」とし、とくに浄土美術に焦点を合せることにした。国内において、以下のように、絵画、建築、彫刻等の専門家が大阪府富貴寺と京都府平等院鳳凰堂を総合的に調査した。

富貴寺総合学術調査: 45年12月6日より12日まで。

第1回鳳凰堂総合学術調査: 46年8月4日より14日まで。

第2回鳳凰堂総合学術調査: 47年8月29日より9月4日まで。

また、世界各地の博物館、美術館に散在している敦煌出土の絹画の総合的調査のため、高田 修氏を、46年10月25日より12月18日まで、インド、ソ連邦、西ドイツ、フランス、イギリス、アメリカへ派遣した。

さらに、ソ連邦中央アジアの仏教美術関係遺跡、遺品の研究状況の報告を受けるため、ソ連邦科学アカデミー・東洋学研究所の G. M. Bongard-Levin 氏を、47年11月5日より19日まで、招聘した。なお氏の報告は *East Asian Cultural Studies*, Vol. XII, Nos. 1-4, 1973, pp. 11-28 に掲載した。

本調査研究は、47年度をもって一応終了したが、鳳凰堂の調査報告書の作成は、48年度にもひきつづいておこなう予定である。また、本計画に関連して、「仏教美術に関する研究の現状」の編集をおこなったが、これについては次項「連絡および情報交換」を参照されたい。

F. 「世界における東洋学の現状調査」

【期間】47年度より7カ年計画。【専門委員】護 雅夫 (委員長), 北村 甫, 武田幸男, 田中正俊, 島海 靖, 松村 潤, 山崎元一。

【事業内容】本計画は、その第一歩として49年度までに、日本におけるアジア研究および日本研究の現状を調査することとし、日本研究を19の領域に、日本以外のアジア諸国研究を27の領域に分け、それぞれの領域の調査者の選定と調査の依頼をおこなった。

2. 連絡および情報交換

A. 文献目録等の作成

「東アジアおよび東南アジアに関する欧文文献目録の目録、そのⅡ」

"A Survey of Bibliographies in Western Languages concerning East and Southeast Asian Studies, Part II" 1969, xiii+163 p.

本書は *Bibliographies* シリーズの No. 5 で、東アジアと東南アジアを対象とした、社会科学と人文科学の分野の文献目録の目録である。1966年刊行の同名の目録は、単行本として出版された文献目録を扱ったが、本書は、学術雑誌に発表された文献目録を扱った。

「アジア研究の研究機関および研究者一覧—カンボジア編・ラオス編・マレーシア編・シンガポール編・ベトナム編」

"Research Institutes and Researchers of Asian Studies in Cambodia, Laos, Malaysia, Singapore, and the Republic of Vietnam" 1970, vii+183 p.

本書は *Directories* シリーズの No. 8 で、カンボジア編、ラオス編、マレーシア編、シンガポール編、ベトナム共和国編に分れている。研究機関は、名称、機関長名、創立年、機構、主要事業内容、出版物をあげ、研究者は、所属機関ごとに列記し、氏名、生年、学歴、職歴（現職）、専門、主要業績をあげた。

"Inventory of Buddhist Art Studies in Japan"（仮題）

本書は、上記の調査研究E「仏教美術に関する研究」の専門委員会の責任のもとに、45年度より編集をはじめ、48年度に出版の予定である。1960年から69年までに発表された仏教美術に関する研究を網羅的に調査し、その結果は「仏教美術文献目録」として、48年度に、中央公論美術出版社から出版される予定である。本書の内容は、調査した文献の中から選んだ約3,000点の文献の目録とその著者名索引、および専門家の執筆による研究動向である。

B. 資料目録の作成

センターは、ユネスコの重要歴史文書のマイクロフィルム化計画によって、アジア諸国で撮影されたマイクロフィルムの保管センターに指定されている。42年度に到着

した、マレーシア・シンガポールからのユネスコ・マイクロフィルムを43年度にひきつづき整理し、その目録の後半部分を *East Asian Cultural Studies*, Vol. VIII, Nos. 1-4, 1969, pp. 41-52 に掲載した。カンボジアからのマイクロフィルムも42年度に受け入れ、43年度に整理をおこなった。内容は *Journal officiel de l'Indochine française* (4 janv. 1904-30 décembre 1915) と欧文の仏領インドシナに関する研究書である。この目録、およびマレーシア・シンガポールの部と合せた索引を、*East Asian Cultural Studies*, Vol. VIII, Nos. 1-4, 1969, pp. 53-91 に掲載した。

センターは、44年度にフィリピンの部 196リールを受けとり、整理した。内容は、マニラの国立文書館所蔵のスペイン語文書で、教育施設に関するもの 83リール、マニラ市に関するもの 54リール、ギャンブル規制に関するもの 38リール、マラセーニャン宮殿に関するもの 21リールである。このマイクロフィルムに関する解説およびその目録を *East Asian Cultural Studies*, Vol. IX, Nos. 1-4, 1970, pp. 57-107 に掲載した。

センターは、45年度にインドの部 189リールを受けとり、整理した。内容はインド各地の図書館が蔵している各種言語の古写本である。図書館名と写本の使用言語は以下のとおりである。

Calcutta: National Library (Sanskrit and Persian); Bangiya Sahitya Parisad (Sanskrit); The Sanskrit College (Sanskrit); The Victoria Memorial Hall (Arabic); Nagpur University Library (Sanskrit); University of Burdwan (Sanskrit and Persian); Calcutta University Library (Sanskrit); The Asiatic Society, Calcutta (Arabic, Persian and Sanskrit).

New Delhi: The National Museum (Sanskrit, Persian and Prakrit); Sri Mahavir Jain Public Library and Reading Room (Sanskrit).

Gauhati: Narayani Hindiqui Historical Institute (Sanskrit and Assamese); MSS of Kamarupa Anusandhan Samiti preserved at the Assam State Museum (Assamese).

Hyderabad: Salar Jung Museum Library (Persian and Arabic); Osmania University (Sanskrit, Persian, Arabic and Jaina Apabhramśa); State Archives, Government of Andhra Pradesh (Persian); State Central Library (Persian and Arabic); Dā'irat-ul Ma'arif-il Osmania (Arabic); Sayeedia Library Association (Arabic); Andhra University, Waltair (Sanskrit).

Jammu: Sri Ranbir Sanskrit Research Institute (Sanskrit); The Bhuri Singh Museum (Sanskrit); State Chandradhari Museum (Sanskrit).

Madras: Government Oriental Manuscripts Library (Sanskrit and Persian); Oriental Research Institute (Sanskrit); Office of the Government Epigraphist for India (Sanskrit); Sri Venkateswar University, Oriental Research Institute

(Sanskrit and Prakrit); The Bureau of Tamil Publications (Tamil).

Patna: Khuda Bakhsh Oriental Public Library (Arabic and Persian); Patna University (Sanskrit and Prakrit); State Chandradhari Museum (Sanskrit).

Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute (Sanskrit); The Asiatic Society of Bombay (Sanskrit); Bombay University Library (Sanskrit); H. P. T. College (Sanskrit); Deccan College Post Graduate and Research Institute (Sanskrit).

Thanjavur: The Sarasvati Mahal Library (Sanskrit and Tamil).

Trivandrum: Oriental Research Institute and Manuscript Library (Sanskrit and Malayalam).

このマイクロフィルムの目録およびその索引は、*East Asian Cultural Studies*, Vol. X, Nos. 1-4, 1971, pp. 53-85, および同誌, Vol. XII, Nos. 1-4, 1973, pp. 29-103 に掲載した。

ユネスコ・マイクロフィルムの最後のものとして、ネパールの部は、46年度に、受け入れ、整理した。その目録は、

“List of Microfilms Deposited in the Centre for East Asian Cultural Studies, Part 7. Nepal” として、47年度に刊行した。

46年度の東洋文庫展示会に協力して、ポルトガルのアジア進出史に関する史料を調査し、その目録を所内資料として刊行した。

C. 図書の寄贈および交換

センターは、その出版物を、国内の主要大学、研究所の図書館、および各国在日大使館等約 200 カ所に、国外の主要大学、研究所の図書館、各国ユネスコ国内委員会、日本政府在外公館等約 200 カ所に定期的に寄贈している。また、国内の研究所約 50 カ所、国外の研究所約 100 カ所から定期的に出版物の寄贈を受けている。

D. 「日本における近代中国研究の現状」調査

45年度に、イギリスの *China Quarterly* に協力して、20 世紀の中国を研究する研究者に関する情報を収集し、整理した。47年度には、この事業を恒常的に遂行するための準備をおこなった。

E. 機関紙 *East Asian Cultural Studies* (英文) の刊行

43年度、第 8 巻、1/4 合併号。

富永健一他「タイ国社会の近代化と工業化—社会学的分析・I」, 「ユネスコ・マイクロフィルム目録・マレーシアの部・II・カンボジアの部」, 「ユネスコ・マイ

クロフィルム目録の索引」

44年度, 第9巻, 1/4 合併号。

富永健一他「タイ国社会の近代化と工業化—社会学的分析・Ⅱ」, 「ユネスコ・マイクロフィルム目録・フィリピンの部」

45年度, 第10巻, 1/4 合併号。

梅溪 昇「お雇い外国人」, 「センター事業報告, 1968-70」, 「ユネスコ・マイクロフィルム目録・インドの部・Ⅰ」

46年度, 第11巻, 1/4 合併号。

「東アジア諸国における家族と宗教に関する国際シンポジウム議事録」(特集号)

47年度, 第12巻, 1/4 合併号。

プラチョーム・チョムチャイ「タイ国における人権思想の発展」, ボンガード・レビン「ソ連邦における仏教学の現状とソ連領中央アジアにおける仏教遺跡の発掘」, 「ユネスコ・マイクロフィルム目録・インドの部・Ⅱ」, 「ユネスコ・マイクロフィルム目録の索引 (インドの部)」

3. 学術図書出版

A. 東アジア文化研究シリーズ (英文)

No. 13 夜久正雄著「古事記のいのち」1969, ix+208 p., 5 図, 3 地図。

Nos. 14/15 ボニー・マクドゥーガル著「中国における西洋文学理論の導入, 1919-1925」1971, xii+368 p.

B. 専門書シリーズ (英文)

ティパコラウオン(チャディン・フラッド訳注)「ラーマ4世年代記」第4巻(注および付録), 1973, iv+197 p.

「史料よりみたる明治維新」第1巻, 1969, vi+221 p. 第2巻, 1970, x+235 p. 第3巻, 1972, xi+275 p.

4. 研究会

劉子健(アメリカ)「南宋政治新探—官僚化した独裁絶対君主, 官僚主義および農民起義—」(43年4月13日)

A. Subbiah (インド)「タミル学とタミル研究所の設立について」(44年11月7日)

徐先堯(中国)「随倭国交の問題点について」(45年10月17日)

Charles Haguenauer (フランス)「フランスにおける日本研究の現状について」(45年11月4日)

W. G. Beasley (イギリス) および Ch. R. Boxer (イギリス)「イギリスにおける日本研究ならびにアジア研究について」(47年10月9日)

G. M. Bongard-Levin (ソ連)「ソ連における仏教学の現状とソ連領中央アジアにおける仏教遺跡の発掘」〔備考〕財団法人東方学会と共催、於霞山会館。(47年11月17日)

Thomas Thilo (東ドイツ)「東ドイツにおけるアジア研究について」(48年1月23日)

5. 語学講習会

・カンボジア語講習会

【日時】43年7月8日より8月30日まで

【講師】坂本恭章、ネアック・ソック・チョムラウン

・チベット語講習会

【日時】44年8月4日より9月12日まで

【講師】北村 甫、山口瑞鳳、ソナム・ギャツォ

・朝鮮語講習会

【日時】45年7月20日より8月28日まで

【講師】大谷森繁、李喜燮、李賢起

・トルコ語講習会

【日時】46年7月21日より8月24日まで

【講師】竹内和夫、サバハッティン、シナン、メテ・トンジュク

・モンゴル語講習会

【日時】47年7月10日より8月25日まで

【講師】小沢重男、セベック・ドルジ、城生伯太郎

6. 国際交流

A. 海外出張

上記の事業以外の目的で海外に出張した者は以下のとおりである。

榎 一雄 45年4月より7月まで。オーストラリア・シドニー大学客員教授。

生田 滋 45年10月より46年4月まで。インドネシア・インドネシア大学客員講師。

B. ユネスコ・フェローの受入れ

Hilda Chen-Apuy (コスタリカ) 【期間】43年4月より5月。【目的】日本の仏教美術の研究。

李喜昌 (韓国) 【期間】43年8月より9月。【目的】出版技術の研究。

黄元九 (韓国) 【期間】44年3月より7月。【目的】李朝期の燕行録の研究。

Ilya Foniakov (ソ連) 【期間】44年6月より12月。【目的】日本文化の研究。

Satyawati Suleiman (インドネシア) 【期間】44年9月より10月。【目的】考古学および遺跡保存の研究。

Do Ba Vinh (ベトナム) 【期間】45年5月より7月。【目的】仏教美術の研究。

Soubert Son (カンボジア) 【期間】45年10月より11月。【目的】文化遺跡・遺品の保存に関する研究。

C. その他

センターは、トルコ人学者 Gülçin Candarlioglu 氏を、東洋文庫研究部と協力して、44年9月より45年7月まで、客員研究員として受け入れた。

上記事業以外の目的で、センターを訪れ、センターが便宜供与した外国人学者は以下のとおりである。

43年度

Hsueh Shou-sheng 薛壽生(香港), Pedro J. Abella(フィリピン), Nguyen Huy Tho (ベトナム), António da Silva Rego(ポルトガル), Shiro Saito(アメリカ), Roger F. Hackett (アメリカ), Jo Yung-Hwan 曹瑛煥 (アメリカ), H. C. Koh (アメリカ), Dietrich Treide (東ドイツ), Yves Hervouet (フランス), Jerry P. Dennerline (アメリカ), Mahdi Elmandjra (ユネスコ), N. A. Bammate (ユネスコ), Yasushi Kono 河野 靖 (ユネスコ), Meir Gavish (イスラエル), Mahinda Werake(スリランカ), G. Walter Robinson(イギリス), Jean Meuvret (フランス), Kullasap Gesmankit(タイ), J. A. Niels Mulder(アメリカ), Subekti Dhirdjosaputro (インドネシア), Won Chang-hoon (韓国), Yusof bin Mydin

(マレーシア), Runjuan Intarakumhang (タイ)。

44年度

Graciela González de la Lama (メキシコ), Tan Yeak Seong 陳育崧 (シンガポール), G. Raymond Nunn (アメリカ), Willard H. Elsbree (アメリカ), M. J. Meijer (オランダ), Minoru Kiyota (アメリカ), Robert E. Cole (アメリカ), Edgar Wickberg (カナダ), Kim Dong Wei 金東衛 (韓国), Lee Hae Kwan 李海寛 (韓国), Douglas L. Johnson (アメリカ), Chen Ching-ho 陳荊和 (香港), Edward K. Chang 張恭徳 (中国), Koo Byung Sak 丘秉朔 (韓国), James J. Meany, S. J. (フィリピン), Janice Mary Stargardt (オーストラリア), Koentjaraningrat (インドネシア), Giok Po Oey (アメリカ), Liang Chia-pin (中国), Martina Deuchler (スイス), Charles Meyer (カンボジア), R. Santos Cuyugan (フィリピン), Chung Hae Taek 丁海澤 (韓国), Walter Simon (イギリス)。

45年度

Lee Dutton (アメリカ), Kim Ik-jo (韓国), Tilman Spengler (西ドイツ), Adriana Boscaro (イタリア), Saneh Chamarik (タイ), Yasushi Kono 河野 靖 (ユネスコ), N. Mahapatra (インド), Nguyen-khoa Phon-Anh (ベトナム), Shing Kar Lama (シッキム), Thon dub pun tsho (シッキム), Domingo Abella (フィリピン), H. M. Lai 麥禮謙 (アメリカ), Chen Cheng-siang 陳正祥 (香港), Vinayshil Gautam (インド), Xavier de Planhol (フランス), Edith Dittrich (西ドイツ), Graciela González de la Lama (メキシコ), A. Kh. Kinany (ユネスコ), Cecil Hobbs (アメリカ), Titima Phitakspraiwan (タイ), Yut Sakdejayont (タイ)。

46年度

Goh Then Chye 吳天才 (マレーシア), Ang Tian Se 洪天賜 (マレーシア), H. W. Bailey (イギリス), David Seyfard Ruegg (オランダ), Roberto V. Reyes (フィリピン), Antonio V. Arizabal, Jr. (フィリピン), Josefa M. Saniel (フィリピン), Paik Syeunggil (韓国), Mete Tunçoku (トルコ), Nguyen Dinh Hoa (ベトナム), Barbara Linné Phillsbury (アメリカ), Mark Scher (アメリカ), Lie Tektjeng (インドネシア), K. Jayatilake (スリランカ), Liang Chia-pin 梁嘉彬 (中国), Jigdal D. Sakyapa (アメリカ, チベット), Pongsak Roongrojpanich (タイ), V. V. Gokhale (インド), Shirleen Wong (アメリカ), Milton W. Meyer (アメリカ), W. Z. Mulder (オーストラリア), Tan Sok Joo (シンガポール), J. A. C. Mackie (オーストラリア), Darsham (インドネシア), Dominicus (インドネシア)。

47年度

James H. Soong 宋漢西 (アメリカ), Yang Yun-pin 楊雲萍 (中国), Shiro Saito (アメリカ), Torbongs Donovanik (タイ), Edward S. Krebs (アメリカ), Ryu Tong-shik 柳東植 (韓国), Ch'en Chieh-hsien 陳捷先 (中国), Kent Smith (アメリカ), Ts'ao Yung-ho 曹永和 (中国), Bailey W. Diffy (アメリカ), Richard Staubitz, László Ferenczy (ハンガリー), Istvan Halla (ハンガリー), Hans-Jochen Tewes (東ドイツ), Hubert Durt (フランス), Rev. Kundeling (インド, チベット), Tenzin (インド, チベット), Pema (インド, チベット), Kasem Suwanagul (タイ)。

IV 業務報告

1. 庶務報告

A. 財団法人東洋文庫理事会・評議員会

理 事 会

第188回 昭和43年5月14日 (火)

第189回 昭和43年9月24日 (火)

第190回 昭和43年12月3日 (火)

第191回 昭和43年12月3日 (火)

第192回 昭和44年5月20日 (火)

第193回 昭和44年10月7日 (火)

第194回 昭和44年12月2日 (火)

第195回 昭和45年5月19日 (火)

第196回 昭和45年11月17日 (火)

第197回 昭和46年7月2日 (火)

第198回 昭和46年11月11日 (木)

第199回 昭和47年2月26日 (土)

第200回 昭和47年6月7日 (水)

第201回 昭和47年11月7日 (火)

第202回 昭和47年11月7日 (火)

評 議 員 会

第85回 昭和43年5月14日 (火)

第86回 昭和43年12月3日 (火)

第87回 昭和44年5月20日 (火)

第88回 昭和45年5月19日 (火)

第89回 昭和46年7月2日 (火)

第90回 昭和47年6月7日 (水)

第91回 昭和47年11月7日 (火)

B. 東洋学連絡委員会

昭和43年度

前期 (昭和43年11月26日) 【議題】(1)昭和43年度財団法人東洋文庫事業中間報告について (2)昭和44年度財団法人東洋文庫事業計画案について

後期 (昭和44年3月25日) 【議題】(1)昭和43年度財団法人東洋文庫事業報告について (2)昭和44年度財団法人東洋文庫事業計画案について

昭和44年度

(昭和44年10月14日) 【議題】(1)昭和44年度財団法人東洋文庫事業中間報告について (2)昭和45年度財団法人東洋文庫事業計画案について

昭和45年度

前期（昭和45年11月17日）【議題】(1)昭和45年度財団法人東洋文庫事業中間報告について (2)昭和46年度財団法人東洋文庫事業計画案について (3)委員改選について (4)その他

後期（昭和46年3月23日）【議題】(1)昭和45年度財団法人東洋文庫事業中間報告について (2)昭和46年度財団法人東洋文庫事業計画案について (3)その他

昭和46年度

前期（昭和46年9月28日）【議題】(1)昭和46年度財団法人東洋文庫事業中間報告について (2)昭和47年度財団法人東洋文庫事業計画案について

後期（昭和47年3月14日）【議題】(1)昭和46年度財団法人東洋文庫事業中間報告について (2)昭和47年度財団法人東洋文庫事業計画案について (3)その他

昭和47年度

前期（昭和47年10月17日）【議題】(1)昭和47年度財団法人東洋文庫事業中間報告について (2)昭和48年度財団法人東洋文庫事業計画案について (3)その他

後期（昭和48年3月6日）【議題】(1)昭和47年度財団法人東洋文庫事業中間報告について (2)昭和48年度財団法人東洋文庫事業計画案について

C. ユネスコ東アジア文化研究センター運営委員会・顧問会

運営委員会

昭和43年度【前期】昭和43年11月26日 【後期】昭和44年3月25日

昭和44年度【前期】昭和44年10月14日 【後期】昭和45年3月25日

昭和45年度【前期】昭和45年9月29日 【後期】昭和46年3月23日

昭和46年度【前期】昭和46年9月28日 【後期】昭和47年3月14日

昭和47年度【前期】昭和47年10月17日 【後期】昭和48年3月6日

顧問会議

昭和43年度 昭和43年11月26日

昭和44年度 昭和44年10月14日

昭和45年度 昭和45年9月29日

昭和46年度 昭和46年9月28日

昭和47年度 昭和47年10月17日

D. 東洋文庫維持会

本維持会は、財団法人東洋文庫の事業を援助発展させることを目的として結成され

たもので、現在の会員は下記の通り48社である。会員には普通会員（個人）、賛助会員（個人又は法人団体）、及び特別会員があり、特別会員を除き年会費（普通会員1口5千円以上、賛助会員1口50千円以上）を納入する。

東洋文庫維持会会員名簿

（昭和48年3月31日現在 敬称略・順不同）

三 菱 重 工 業 株式会社
 株式会社 三 菱 銀 行
 旭 硝 子 株式会社
 三 菱 化 成 工 業 株式会社
 三 菱 金 属 鋁 業 株式会社
 三 菱 商 事 株式会社
 三 菱 地 所 株式会社
 三 菱 石 油 株式会社
 三 菱 電 機 株式会社
 三 菱 レ イ ヨ ン 株式会社
 日 本 郵 船 株式会社
 三 菱 鋁 業 株式会社
 三 菱 信 託 銀 行 株式会社
 三 菱 倉 庫 株式会社
 明 治 生 命 保 險 相互会社
 株式会社 竹 中 工 務 店
 千 代 田 化 工 建 設 株式会社
 東 京 急 行 電 鉄 株式会社
 日 興 証 券 株式会社
 麒麟 麦 酒 株式会社
 三 菱 自 動 車 販 売 株式会社
 東 京 海 上 火 災 保 險 株式会社
 三 菱 ア セ テ ー ト 株式会社
 三 菱 瓦 斯 化 学 株式会社

三 菱 化 工 機 株式会社
 三 菱 樹 脂 株式会社
 三 菱 製 鋼 株式会社
 三 菱 製 紙 株式会社
 三 菱 セ メ ン ト 株式会社
 三 菱 モ ン サ ン ト 化 成 株式会社
 三 菱 油 化 株式会社
 日 本 光 学 工 業 株式会社
 小 田 急 電 鉄 株式会社
 株式会社 伊 勢 丹
 株式会社 西 武 百 貨 店
 株式会社 日 立 製 作 所
 株式会社 明 電 舎
 戸 田 建 設 株式会社
 東 亜 燃 料 工 業 株式会社
 日 本 信 託 銀 行 株式会社
 富 士 紡 績 株式会社
 本 田 技 研 工 業 株式会社
 味 の 素 株式会社
 日 産 火 災 海 上 保 險 株式会社
 東 亜 港 湾 工 業 株式会社
 エ ー ザ イ 株式会社
 精 工 産 業 株式会社
 誠 和 株式会社

E. 東洋文庫創立50周年記念特別事業

東洋文庫創立50周年記念特別事業として、次の諸事業を行った。

1. 東洋文庫50周年展の開催

読売新聞社と東急百貨店の協賛を得て、昭和42年10月20日から同年11月1日まで、東急百貨店日本橋店グランド・ホールにおいて開催した。

日本書紀等国宝7点、重要文化財8点を含む東洋文庫所蔵図書資料約700点を出陳した。詳細については、東洋文庫年報昭和42年度版を参照。

2. 書庫及び研究室の増築事業

○特別書庫の増築

昭和7年(1932年)に建築された新館書庫に接続して、鉄筋コンクリート造地階付地上4階建の貴重本、特別図書、マイクロ・フィルム等を保管する書庫(建坪約227平方米、延坪約1,134平方米)を昭和43年3月に完成した。(東洋文庫年報昭和42年度版参照)

更に、昭和45年度において、書庫内附設の書架を完成した。特に、チベット文献架蔵のアルミニウム製特殊書架は、本邦において初の試みとして注目をあびた。

○研究室の増築

敷地東側に大正13年(1924年)建築の本館に接続して鉄筋コンクリート造地階付地上5階建の研究室(建坪約334平方米、延坪約1,686平方米)を昭和44年11月に完成した。特に最新設備の写真室(写真事務室1、電子複写室1、マイクロ撮影室1、現像室3、水洗室1、乾燥室1、計8室)を設置し、1階に図書室、2階、3階に研究室13室を設置した。

○増築費用

特別書庫増築費	61,113千円
新館増築費	123,919千円
計	185,032千円

これらは各界の援助を得て、補助金及び寄付金(財団法人日本船舶振興会補助金101,000千円、その他の寄付金82,976千円)で賄われた。

補助及び寄付先は次の通りである。

東洋文庫創立50周年記念特別事業設備拡充資金補助・寄付者名簿

(敬称略・順不同)

財団法人日本船舶振興会	101,100,000円	旭硝子株式会社	1,270,000円
三菱重工業株式会社	1,970,000円	三菱商事株式会社	1,220,000円
株式会社三菱銀行	1,420,000円	三菱電機株式会社	1,130,000円

三菱地所株式会社	1,130,000円	株式会社神戸銀行	435,000円
三菱化成工業株式会社	1,030,000円	株式会社北海道拓殖銀行	435,000円
三菱信託銀行株式会社	850,000円	株式会社日本不動産銀行	427,500円
三菱油化株式会社	850,000円	財団法人石橋財団	3,000,000円
麒麟麦酒株式会社	850,000円	電気事業連合会	15,000,000円
日本郵船株式会社	750,000円	信託協会	1,250,000円
三菱金属鉱業株式会社	660,000円	東証正会員協会	1,000,000円
東京海上火災保険株式会社	660,000円	生命保険協会	1,500,000円
明治生命保険相互会社	660,000円	日本損害保険協会	800,000円
三菱レイヨン株式会社	660,000円	日本百貨店協会	1,000,000円
三菱石油株式会社	610,000円	武田薬品工業株式会社	1,000,000円
三菱製紙株式会社	520,000円	末松保和	800,000円
三菱セメント株式会社	470,000円	伊藤泰造	5,000円
三菱製鋼株式会社	470,000円	本出澄子・小川芳子	5,000円
三菱モンサント株式会社	470,000円	日本化学繊維協会	1,000,000円
三菱江戸川化学株式会社	470,000円	大谷光照	100,000円
三菱樹脂株式会社	470,000円	住友電気工業株式会社	200,000円
三菱化工機株式会社	470,000円	社団法人クラブ関東	10,000円
三菱鉱業株式会社	470,000円	松下電器産業株式会社	1,000,000円
三菱倉庫株式会社	470,000円	出光興産株式会社	1,000,000円
株式会社日立製作所	2,000,000円	住友化学工業株式会社	500,000円
東京芝浦電気株式会社	1,500,000円	大阪製鋼株式会社	76,000円
株式会社安川電機製作所	150,000円	大谷重工業株式会社	58,000円
株式会社富士銀行	1,275,000円	川崎製鉄株式会社	1,334,000円
株式会社第一銀行	1,275,000円	久保田鉄工株式会社	545,000円
株式会社三井銀行	1,275,000円	神戸製鋼株式会社	631,000円
株式会社三和銀行	1,170,000円	住友金属株式会社	1,295,000円
株式会社住友銀行	1,170,000円	大同製鋼株式会社	126,000円
株式会社日本勧業銀行	1,020,000円	中山製鋼株式会社	100,000円
株式会社日本興業銀行	1,020,000円	日新製鋼株式会社	375,000円
株式会社協和銀行	1,020,000円	日本鋼管株式会社	1,535,000円
株式会社東京銀行	1,020,000円	株式会社日本製鋼所	25,000円
株式会社日本長期信用銀行	727,500円	富士製鉄株式会社	1,991,000円
株式会社大和銀行	727,500円	八幡製鉄株式会社	2,184,000円
株式会社東海銀行	727,500円	株式会社淀川製鋼所	24,000円

三洋電機株式会社	300,000円	紙・パルプ連合会	289,135円
日新電機株式会社	100,000円	アラビア石油株式会社	300,000円
日本軽金属株式会社	200,000円	日本自動車工業会	4,643,000円
住友軽金属工業株式会社	100,000円	東亜燃料工業株式会社	100,000円
日立造船株式会社	100,000円	合 計	183,976,135円

2. 人事報告

昭和43年度から昭和47年度間における東洋文庫役職員の異動は、以下のとおりである。

役員異動

異動年月日	役職名	氏名	就退区分	備考
43・7・27	理事	大原 総一郎	退任 (逝去)	倉敷レーヨン株式会社社長
43・8・12	評議員	阿部 賢一	退任	早稲田大学総長
"	"	時子山 常三郎	就任	"
43・12・3	"	中山 素平	"	株式会社日本興業銀行会長
"	"	長谷川 周重	"	住友化学工業株式会社社長
44・5・29	"	大河内 一男	退任	東京大学総長
"	"	加藤 一郎	就任	"
44・7・19	"	永沢 邦男	退任	慶応義塾大学塾長
"	"	佐藤 朔	就任	"
45・2・20	"	奥田 東	退任	京都大学学長
"	"	前田 敏男	就任	"
45・10・26	"	時子山 常三郎	退任	早稲田大学総長
"	"	村井 資長	就任	"
45・11・18	理事長	細川 護立	退任 (逝去)	文化財保護委員会委員
45・11・18	理事	榎 一雄	就任	財団法人東洋文庫専務理事、東京大学教授
46・11・7	代理理事	岩井 大慧	退任 (逝去)	駒沢大学教授

東洋学連絡委員会委員異動

異動年月日	役職名	氏名	就退区分	備考
46・11・7	常任委員	岩井大慧	退任	

ユネスコ東アジア文化研究センター役員異動

異動年月日	職名	氏名	就退区分	移動年月日	職名	氏名	就退区分
43・11・16	運営委員	加藤俊彦	就任	46・3・9	"	泉清一	"
"	"	桃裕行	"	46・3・10	"	鈴木敬	就任
"	"	小口偉一	"	46・9・12	"	桃裕行	退任
"	"	高田修	"	46・9・13	"	沼田次郎	就任
"	顧問	杉野目晴貞	"	47・2・27	"	小倉武一	退任
44・3・14	運営委員	関野克	退任	47・2・28	"	鹿子木昇	就任
44・9・30	"	相良惟一	"	"	"	犬丸直	"
"	"	藪内清	"	"	顧問	朝吹三吉	退任
"	"	加藤俊彦	"	"	"	金田一京助	"
44・10・1	"	市村真一	就任	"	"	杉野目晴貞	"
"	"	森鹿三	"	47・9・29	運営委員	鈴木敬	"
"	"	氏原政治郎	"	"	"	潮見俊隆	"
44・9・30	"	菅沼潔	退任	47・9・30	"	高柳信一	就任
45・3・15	"	広長敬太郎	就任	"	"	荒松雄	"
45・9・17	"	氏原政治郎	退任	"	顧問	平塚益徳	"
45・9・18	"	河野健二	就任	47・10・20	運営委員	犬丸直	退任
"	"	潮見俊隆	"	47・10・21	"	笠木三郎	就任
"	"	泉清一	"	"	顧問	伊藤良二	"
"	"	小口偉一	退任	47・11・11	"	徳永康元	"

職員異動

就 職 者			退 職 者		
区 分	年 月 日	氏 名	区 分	年 月 日	氏 名
総務部	44・4・1	宇田川 善 吉	総務部	44・4・30	勝 間 勇次郎
	44・7・1	吉 野 マサ子		44・6・30	秋 元 美恵子
	45・2・10	小 林 節 子		45・9・30	小 林 和 広
研究部	45・10・1	光 田 憲 雄	45・4・30	小 林 ゆき子	
	43・4・1	竺 沙 雅 章	45・9・15	吉 野 マサ子	
	45・4・1	長 正 統	47・1・31	倉 沢 千代子	
	〃	川 崎 信 定	47・6・30	小 林 節 子	
	〃	永 田 雄 三	48・3・27	石 井 浜 吉	
ユネスコ	46・4・1	渡 辺 紘 良	図書部	44・3・31	熊 田 信次郎
	46・9・10	トプテン・ダタク		46・4・1	石 黒 弥 致
	45・4・1	篠 原 純 子	研究部	47・3・31	岩 崎 富 久 男
				43・12・31	荒 川 裕 子
				44・3・31	柴 田 邦 子
				〃	西 義 郎
				45・3・31	杉 本 百 合 憲
				46・4・30	石 田 正 憲
				47・3・31	宮 坂 宏
				〃	渡 辺 紘 良
		47・8・31	今 泉 美佐子		
		48・3・3	トプテン・ダタク		
			ユネスコ	44・8・31	関 聰 恵
				46・12・31	篠 原 純 子
				47・3・31	中 井 佐恵子
				47・6・30	丹 奈々子

総務部長異動

就 任		退 任	
年 月 日	氏 名	年 月 日	氏 名
46・4・1	河 野 六 郎	46・3・31	小 林 吟重郎
47・4・1	護 雅 夫	47・3・31	河 野 六 郎
47・10・1	早 船 艶 雄	47・9・30	護 雅 夫

3. 会計報告

昭和47年度財団法人東洋文庫の収入支出予算書は、以下のとおりである。

昭和47年度財団法人東洋文庫予算							
収入の部		金額 (千円)		支出の部		金額 (千円)	
科	目			科	目		
一般会計				一般会計			
維持会費	収入	15,200		経常	費	27,200	
財産	収入	5,800		人事	費	21,200	
事業	収入	10,000		事務	費	6,000	
雑収	入	100		事業	費	22,650	
国庫補助金		19,000		I 東洋学	連絡	委	150
				II 東員査	運	費	5,700
				III 調査	研	費	7,590
				IV 研究	資	費	4,330
				V 普及	活	費	300
				VI 研究	者	養	1,080
				VII 資	料	成	3,500
				予	備	費	250
計		50,100		計		50,100	
特別会計				特別会計			
ユネスコ	東アジア	33,000		ユネスコ	東アジア	33,100	
文化研究	センター	31,000		文化研究	センター	19,550	
国庫補助金		1,540		経常	費	16,808	
ユネスコ	補助金	10		人事	費	2,742	
財産	収入	550		事業	費	13,340	
雑収	入	11,000		運営	委	及	115
文部省科学研究費補助金		15,000		顧問	査	費	6,620
三菱財団人文科学				連絡	情	費	3,200
三研究	助成金			出版	報	費	2,520
				シ	作	研究	621
				便	ム	費	264
				予	等	費	210
				文部省	供	費	11,000
				一般研究	備	費	5,000
				一総合研究	(A) 事業	費	1,600
				三海外学術	調査	費	4,400
				三研究	人	費	15,000
				三研究	成	費	
計		59,100		計		59,100	
合計		109,200		合計		109,200	

昭和43年度から昭和47年度にいたる各年度の国庫補助金の推移は、次表のとおりである。

国庫補助金の推移

年 度	43	44	45	46	47	備 考
金 額	千円 38,100 (38,100)	千円 42,500 (42,002)	千円 46,700 (45,788)	千円 58,700 (57,736)	千円 61,000 (59,807)	()内は 決 算 額

附 役 職 員 名 簿

昭和48年3月31日現在の財団法人東洋文庫の役職員は、以下のとおりである。

1. 役 員

役 職 名	氏 名	現 職
理事長代理 専務理事	榎 一 雄	財団法人東洋文庫研究部長 東京大学教授
"	有 光 次 郎	東京家政大学学長
"	小笠原 光 雄	株式会社三菱銀行相談役
"	川 北 禎 一	株式会社日本興業銀行相談役
"	河 野 六 郎	東京教育大学教授
"	酒 井 杏之助	株式会社第一勧業銀行相談役
"	高 垣 寅次郎	一橋大学名誉教授 日本学士院会員
"	辻 直四郎	国立国会図書館支部東洋文庫長 日本学士院会員 東京大学名誉教授
"	徳 川 宗 敬	神宮大宮司 社団法人日本博物館協会会長
"	松 方 三 郎	株式会社国際テレビフィルム社長
"	松 本 重 治	財団法人国際文化会館理事長
"	山 本 達 郎	国際基督教大学教授 日本学士院会員 東京大学名誉教授
監 事	岡 東 浩	東山農事株式会社専務取締役
評 議 員	梅 原 末 治	京都大学名誉教授
"	加 藤 一 郎	東京大学総長
"	佐 藤 朔	慶応義塾大学塾長
"	中 山 素 平	株式会社日本興業銀行会長
"	長谷川 周 重	住友化学工業株式会社社長
"	前 田 敏 男	京都大学学長
"	俣 野 健 輔	飯野海運株式会社会長
"	村 井 資 長	早稲田大学総長

2. 東洋学連絡委員会委員

役 職 名	氏 名	現 職
委 員 長	辻 直四郎	(前 出)
委 員	板 野 長 八	広島修道大学教授 広島大学名誉教授
委 員	岩 生 成 一	法政大学教授 日本学士院会員
委 員	江 上 波 夫	上智大学教授 東京大学名誉教授
常任委員	榎 一 雄	(前 出)
委 員	貝 塚 茂 樹	京都大学名誉教授
委 員	鈴 木 俊	中央大学教授
委 員	塚 本 善 隆	仏教大学教授
委 員	長 尾 雅 人	鉄工短期大学教授 京都大学名誉教授
委 員	福 井 康 順	大正大学学長 早稲田大学名誉教授
委 員	松 本 信 広	慶応義塾大学講師 慶応義塾大学名誉教授
委 員	宮 崎 市 定	京都大学名誉教授
委 員	森 鹿 三	仏教大学教授 京都大学名誉教授
常任委員	山 本 達 郎	(前 出)
委 員	吉 川 幸次郎	日本芸術院会員 京都大学名誉教授

3. 名誉研究員

氏 名	現 職
W. T. デュ=バリイ	コロンビア大学教授
P. ドウミエヴィユ	フランス学士院会員, 元コレージュ・ド・フランス教授
S. エリセーエフ	ソルボンヌ大学教授, 元ハーヴァード・エンチン研究所長
W. フ ッ ク ス	元ケルン大学教授
B. カルルグレン	元スウェーデン王立極東古代博物館長
E. O. ライシャワー	ハーヴァード大学教授, 元駐日アメリカ大使
W. サ イ モ ン	イギリス学士院会員, 元ロンドン大学教授
G. ト ウ ッ チ	ローマ大学教授, イタリア中東亜研究所長
A. フォン=ガバイン	元ハンブルグ大学教授
A. R. ディヴィス	シドニー大学教授

4. ユネスコ東アジア文化研究センター役員（運営委員・顧問・参与）

A. 運営委員

氏 名	現 職
荒 松 雄	東京大学東洋文化研究所長
一 又 正 雄	明星大学教授
市 村 真 一	京都大学東南アジア研究センター所長
岩 生 成 一	(前 出)
岡 野 澄	日本学術振興会専務理事
尾 高 邦 雄	上智大学教授・東京大学名誉教授
笠 木 三 郎	文部省大学学術局審議官
鹿子木 昇	アジア経済研究所長
河 野 健 二	京都大学人文科学研究所長
高 田 修	成城大学教授
高 柳 信 一	東京大学社会科学研究所長
中 村 元	東京大学教授
沼 田 次 郎	東京大学史料編纂所長
服 部 四 郎	日本学士院会員・東京大学名誉教授
広 長 敬太郎	文部省日本ユネスコ国内委員会次長
福 井 康 順	(前 出)
前 田 陽 一	国際文化会館理事・東京大学名誉教授
松 本 信 広	(前 出)
山 本 達 郎	(前 出)
吉 川 幸次郎	(前 出)

B. 顧 問

氏 名	現 職
伊 藤 良 二	ユネスコ・アジア文化センター理事長
大 浜 信 泉	日本学士院会員
東 畑 精 一	日本学士院会員・アジア経済研究所会長・東京大学名誉教授
徳 永 康 元	アジア・アフリカ言語文化研究所長
原 田 淑 人	日本学士院会員・東京大学名誉教授
久 松 潜 一	日本学士院会員・東京大学名誉教授
平 塚 益 徳	文部省日本ユネスコ国内委員会会長・国立教育研究所長
前 田 充 明	日本学校給食会理事長
宮 沢 俊 義	日本学士院会員・東京大学名誉教授

C. 参 与

氏 名	現 職
青 山 秀 夫	京都大学経済研究所長・京都大学教授
石 田 幹之助	国学院大学教授・日本学士院会員
岩 淵 悦太郎	国立国語研究所長
内 川 芳 美	東京大学新聞研究所長・東京大学教授
織 田 武 雄	京都大学名誉教授
海 後 宗 臣	日本教育学会会長・東京大学名誉教授
佐々木 誠 治	神戸大学経済経営研究所長・神戸大学教授
鈴 木 俊	(前 出)
田 村 実 造	京都大学名誉教授
長 尾 雅 人	(前 出)
丸 山 真 男	東京大学講師
三 上 次 男	青山学院大学教授・東京大学名誉教授
宮 崎 市 定	(前 出)
宮 本 正 尊	東京大学名誉教授
山 田 秀 男	一橋大学経済研究所長・一橋大学教授

5. 東洋文庫職員

図 書 部

辻 直四郎 (部長), 池田直人, 大塚祐子, 小林輝男, 小山 勲, 須藤利子, 竹之内信子, 立花孝全, 児野寿満子, 秩父良子, 中島正之, 西蘭一男, 広瀬洋子, 森岡 康, 渡辺兼庸

研 究 部

榎 一雄 (部長), 岩村 忍 (研究顧問, 京都大学名誉教授), 原田淑人 (研究顧問, 日本学士院会員), 村田治郎 (研究顧問, 京都大学名誉教授), 青山定雄 (中央大学教授), 荒 松雄 (東京大学教授), 市古宙三 (お茶の水女子大学教授), 岩生成一 (前 出), 宇都木 章 (青山学院大学教授), 梅原末治 (前 出), 榎 一雄 (前 出), 岡田英弘 (東京外国語大学助教授), 長 正統, 小野田サヨ子, 亀井 孝 (一橋大学教授), 金子良太, 川崎 信定, 神田信夫 (明治大学教授), 菊池英夫 (北海道大学助教授), 北村 甫 (東京外国語大学教授), 草野靖 (熊本大学助教授), ケツン・サンボ, 河野六郎 (前 出), 後藤均平 (立教大学教授), 佐伯 富 (京都大学教授), 末松保和 (学習院大学教授), 鈴木 俊 (前 出), 周藤吉之 (東洋大学教授), 関野 雄 (東京大学教授), 祖南 洋, 田川孝三 (日本大学講師), 田中時彦 (東海大学教授), 田中正俊 (東京大学助教授), 笠沙雅章 (京都大学助教授), 辻 直四郎 (前 出), 鶴見尚弘 (山梨県立女子短期大学助教授), 土肥義和, 鳥海 靖 (東京大学助教授), 中嶋 敏 (東京教育大学教授), 二瓶幸子, 坂野正高 (東京大学教授), 藤枝 晃 (京都大学教授), 本庄比佐子, 松本信広 (前 出), 松村 潤 (日本大学教授), 三根谷 徹 (東京大学教授), 村松祐次 (一橋大学教授), 護 雅夫 (東京大学教授), 山口瑞鳳 (東京大学助教授), 山根幸夫 (東京女子大学教授), 山本達郎 (前 出), 山崎元一 (国学院大学助教授)

総 務 部

早船艶雄 (部長), 白倉豊松, 宇田川善吉, 染谷コウ, 平野 豊, 星野景子, 光田憲雄, 谷治嘉紀

ユネスコ東アジア文化研究センター

辻 直四郎 (所長), 榎 一雄 (副所長), Nguyen Khac Kham, (専門員), 厚地麗子, 生田 滋, 河野六郎, 後藤 明, 小山 勲, 外池明江, 土肥義和, 直井靖夫, 広瀬洋子, 松前義治

6. 東洋文庫臨時職員

昭和43年4月1日から昭和48年3月31日に至る間に臨時職員として在籍した者は、以下のとおりである。

【昭和43年度】

飯島千賀子（～44）、市古恭子、伊藤佳子、榎本顕郎、遠藤純子（～44）、刈田 徹（～47）、国岡妙子、窪添慶文（～45）、小林幸夫（～45）、竹村正子（～45）、田中幸子、谷口恵美子、谷口信子、丹 喬二、中井英基（～44）、中村悠子、中山皎子（～47）、中山道子（～44）、西田幸子、星 実千代（～47）、堀内安雄、細野浩二（～45）、松島光子（～44）、緑川勝子、柳場知子（～44）

【昭和44年度】

相田 洋、浅見久隆、荒川裕子、伊藤 滋、岩崎道雄、内田晶子、小井川京子、大谷智子（～45）、小沼直澄、加藤和子、川島正子、川西敬泊、菊地徳子（～45）、木下由紀太、小林征子（～45）、酒井貴子（～45）、佐藤智水、志部昭平（～45）、島田 澄、滝田利行、武部徳子（～45）、田中宏己、中里成章（～45）、中田美智子（～45）、永田真知子、名倉洋子、二藤徳美（～45）、浜口卓也、藤野和夫、古坂光一、前田恵美子（～46）、三好清隆、本橋照代（～45）、山名弘史（～47）、脇田重雄

【昭和45年度】

生熊千枝子、石井正敏、石田由次郎、梅原四郎、梅村 担、梅本滋美、小川鍼次郎、川崎寿々子、木下シゲコ（～47）、草野章典、熊田信次郎（～47）、小宮恒雄（～47）、貞兼綾子（～47）、新藤武彦（～46）、鈴木 茂、関 真興、高山知久、田口栄一（～46）、田中教子（～46）、田中敬子、谷口幸江、中島一雄、成田修一、林 俊雄（～47）、平山邦治、古沢宣子（～47）、星山晋也、細田憲示、松田洋太郎、松前道子、三木恒夫、百橋公然（～47）、毛利一憲、森安孝夫、山内隆夫、横瀬直美

【昭和46年度】

市古健次、遠藤純子、勝亦斐子、加藤和子（～47）、加藤純章、神田芙美子（～47）、土肥祐子、長野泰彦、蜂尾亮子（～47）、松浦文子、山田千津子（～47）、横田忠司（～47）

【昭和47年度】

伊東照司，伊東伸明，梅村 担，岡部裕章，海田耕三，甲子雅代，加藤恭子，川野
辺 明，木下由紀太，小池 都，小松久男，薨 勇造，寫 春菜，下田玖美子，関
根秋雄，関根謙司，代田貴文，竹谷典子，豊沢 一，永尾もと子，中川しげ子，長
沼真理子，西山 収，野口憲三，芳賀 裕，馬場千枝子，馬場波留美，花田宇秋，
藤井敏江，藤井陽子，前田ヘレナ，真野洋子，森安孝夫，矢野史子

財団
法人 東洋文庫年報 昭和43年度—昭和47年度

昭和49年3月25日発行 非売品

発行者 東京都文京区本駒込 2—28—21

財団法人 東洋文庫

榎 一 雄

印刷者 東京都荒川区西日暮里 5—9—8

三美印刷株式会社

発行所 東京都文京区本駒込 2—28—21

財団法人 東洋文庫

本書は昭和48年度財団法人東洋文庫に対する文部省補助金の一部に依って刊行されたものである

吳平(1910-1981) 著 丁福保(1894-1969) 校

上海古籍出版社 1981年12月第1版

32開 1冊 1.50元

ISBN 7-5326-0111-1

0-9-5星島日報社(香港)有限公司

星島日報社(香港)有限公司

星島日報社(香港)有限公司

星島日報社(香港)有限公司

星島日報社(香港)有限公司

星島日報社(香港)有限公司

星島日報社(香港)有限公司

星島日報社(香港)有限公司